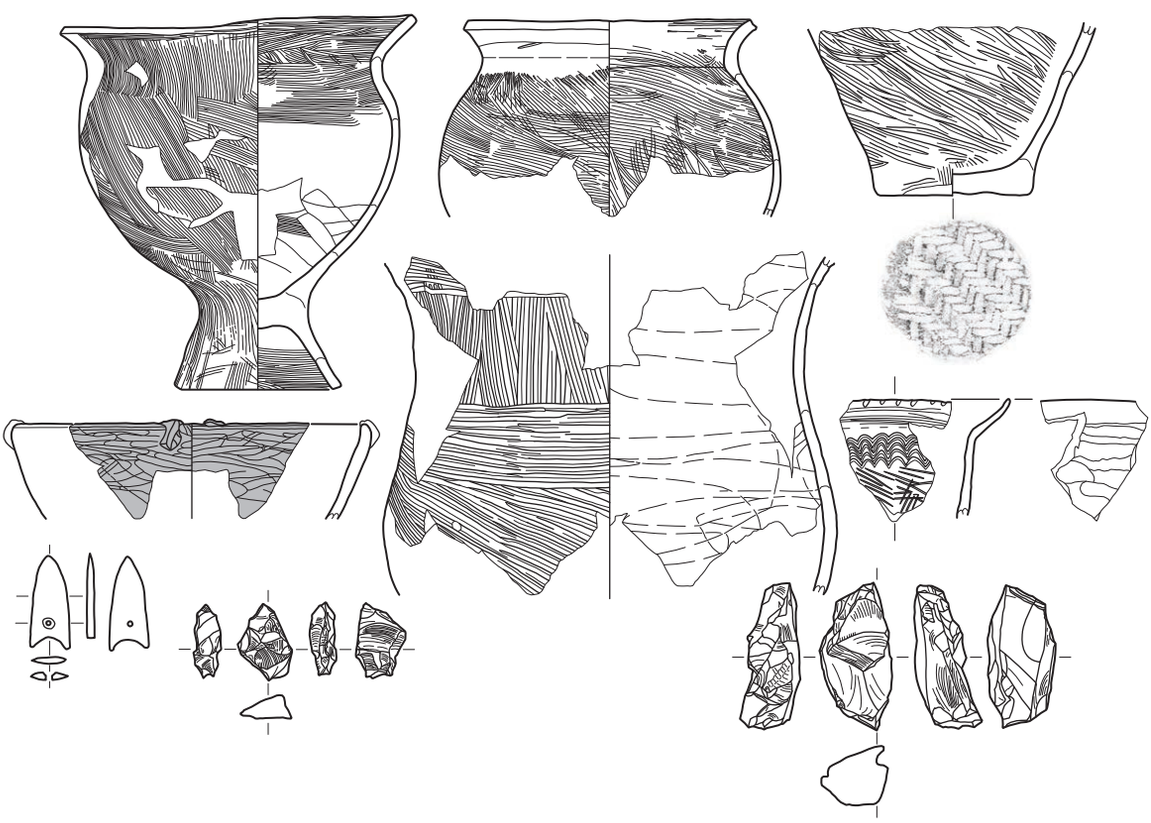
富士河口湖町埋蔵文化財調査報告書　第２集

滝沢遺跡（第５次）

－ガソリンスタンドの建設に伴う発掘調査報告書－



2017.3

富士河口湖町教育委員会

登り坂石油株式会社

例　　言

1．本報告書は、山梨県南都留郡富士河口湖町河口字滝沢 549-1 番地、550-1 番地に計画されたガソリンスタンドの建設工事　に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本発掘の調査主体は富士河口湖町教育委員会であり、杉本悠樹（富士河口湖町教育委員会生涯学習課社会教育係・文化財担当）が担当した。発掘調査期間は平成 28 年（2016）9 月 26 日～ 10 月 11 日である。

3．滝沢遺跡では、国道 137 号河口２期バイパス及び同国道吉田河口湖バイパスの建設工事に伴い平成 17 年（2005・第１次）、平成 21 年（2009・第２次）、平成 23 年（2011・第３次）、平成 25 年（2013・第４次）に発掘調査が山梨県埋蔵文化財センターにより実施されている。今回の発掘調査は富士河口湖町教育委員会が調査主体となるが、滝沢遺跡の通算５回目にあたる調査であるため、第５次調査と称することとした。

4．滝沢遺跡は、第１次調査がⅠ～Ⅲ区、第２次調査がⅣ区・Ⅴ区、第３・４次調査がⅥ区と地区名が付されていたことに基づき、今回の第５次調査の調査範囲をⅦ区と称することとした。

5．本書の執筆・編集は杉本が行った。

6．発掘調査（整理作業及び発掘調査報告書作成まで含む）の費用は事業主体者（登り坂石油株式会社）が負担した。

7．試掘・確認調査（以下試掘調査）から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意としたい。（順不同・敬称略）

山梨県教育庁学術文化財課、三和エンジニアリング株式会社、有限会社　外川設備工業、帝京大学文化財研究所、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県考古学協会、弥生研究会、石神孝子、稲垣自由、入江俊行、大嶌正之、勝俣竜哉、小林健二、佐藤祐樹、澤田大多郎、中山誠二、奈良泰史、新津　健、浜田晋介、平野　修、保坂康夫、堀内　眞、正木季洋、御山亮済、村石眞澄、室伏　徹、森原明廣、渡井英誉

凡　　例

1．本報告書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として以下の通りである。

〔遺構〕全体図：1/1,00、出土遺物分布図：１/150、溝状遺構・土坑・焼土：１/ ４０

〔遺物〕土器：１/ ３、石器：１／２

2．遺構番号は、検出順に付したものである。

3．調査区は世界測地系座標によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって南北グリッド線および図中の図中の北印は真北を指す。

4　遺構挿図中に用いたスクリーントーンは焼土を示す。また遺物のドットは●＝土器、○＝石器の記号で示し、番号は遺物図版の通し番号と対応している。

5　遺物挿図中、土器類の器面に用いたスクリーントーンは赤色塗彩された範囲を示す。

6　遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高（単位はm）を示す。

目　　次

例　言
凡　例
目次
第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 ―― 1
　第１節　調査に至る経緯 ―― 1
　第２節　発掘作業の経過 ―― 2
　第３節　整理等作業の経過 ―― 3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 ―― 3
　第１節　地理的環境 ―― 3
　　１．富士山、御坂山地と河口湖 ―― 3
　　２．滝沢遺跡周辺の地形 ―― 3
　第２節　歴史的環境 ―― 4
　　１．河口湖湖畔の歴史環境 ―― 4
　　２．河口湖北東岸の歴史環境 ―― 5
　　３．滝沢遺跡周辺の調査事例 ―― 7
第Ⅲ章　調査の方法と成果 ―― 10
　第１節　調査の方法 ―― 10
　第２節　層序 ―― 10
　第３節　遺構 ―― 10
　　１．土坑 ―― 10
　　２．焼土 ―― 14
　　３．溝状遺構 ―― 14
　第４節　遺物 ―― 16
第Ⅳ章　総括 ―― 31
　第１節　弥生時代中・後期、古墳時代前期の出土遺物からみた滝沢遺跡と周辺 ―31
　第２節　出土遺物の地域からみた移入路の想定 ―― 31
　第３節　調査の成果と課題 ―― 32

写真図版

表　目　次

第１表　土坑計測表（第８・９・10 図）
第２表　焼土計測表（第９・10・11 図）
第３表　溝状遺構計測表（第 13 図）
第４表　土器・石器観察表（１）
第５表　土器・石器観察表（２）
第６表　滝沢遺跡（第５次調査）出土遺物　時期・地域等系統図

挿図目次

第１図　開発区域及び発掘調査範囲図
第２図　富士河口湖町を経由する歴史の道
第３図　河口湖周辺の歴史の道
第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡
第５図　滝沢遺跡周辺の発掘調査地点
第６図－１　滝沢遺跡（第５次）調査地点平面図（セクション計測地点図）
第６図－２　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（全体図）
第６図－３　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（分割・詳細図１）
第６図－４　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（分割・詳細図２）
第７図　滝沢遺跡第５次調査（Ⅶ区）全体図
第８図　SK001 土坑　平面・断面図
第９図　SK002 土坑・焼土１　平面・断面図
第 10 図　SK003・004・005 土坑　平面図・断面図
第 11 図　焼土２　平面図
第 12 図　焼土３　平面図
第 13 図　SD001 溝　平面図・断面図
第 14 図　滝沢遺跡　第５次調査（Ⅶ区）出土遺物分布図
第 15 図　出土遺物実測図（１）
第 16 図　出土遺物実測図（２）
第 17 図　出土遺物実測図（３）
第 18 図　出土遺物実測図（４）
第 19 図　出土遺物実測図（５）
第 20 図　出土遺物実測図（６）
第 21 図　遺物出土状況詳細図
第 22 図　滝沢遺跡（第５次調査）出土遺物移入ルート想定図

写真図版目次

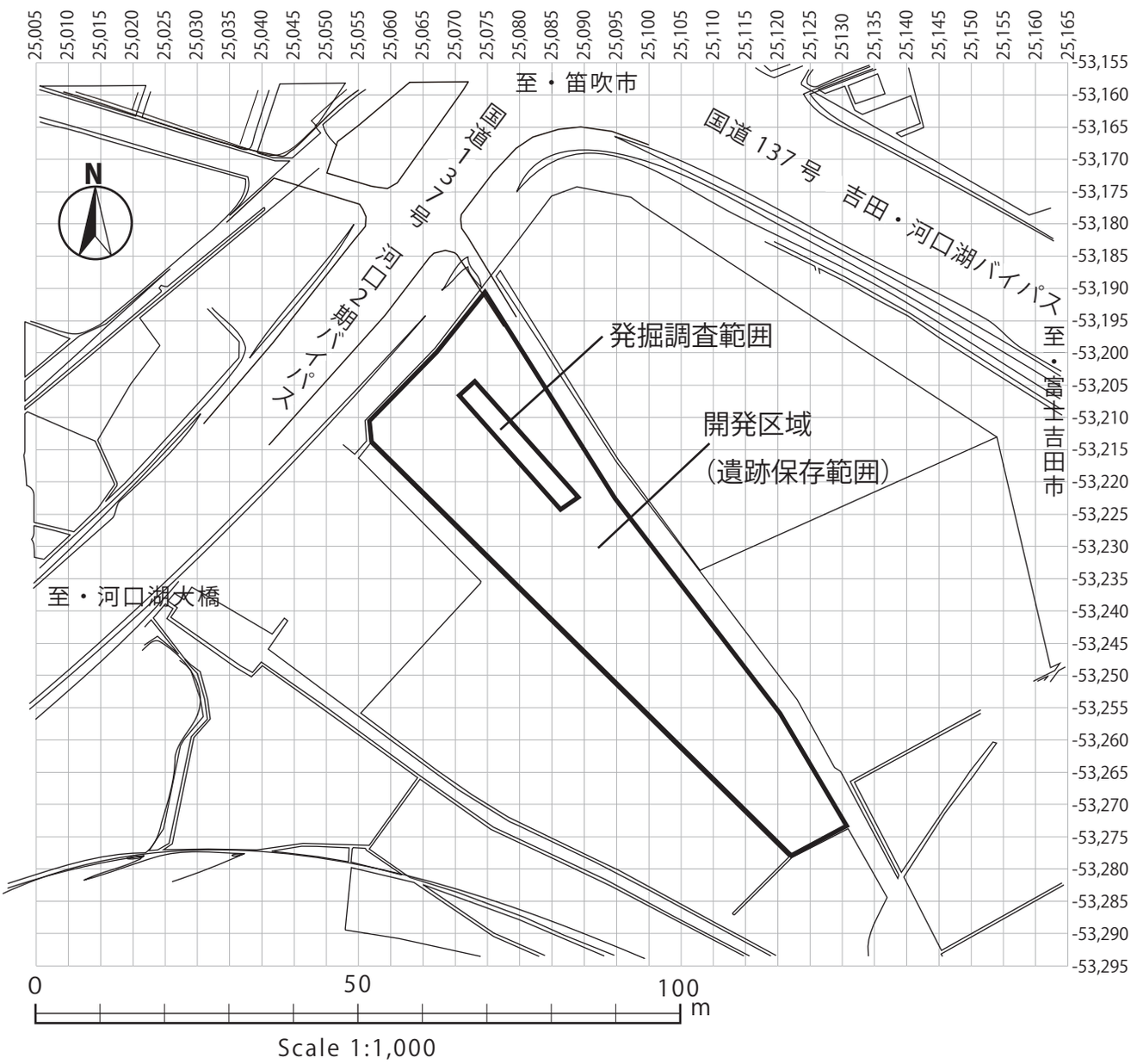
写真図版１
１．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）垂直写真
２．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）全景　南東から
３．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）調査風景
写真図版２
１．SK001 覆土断面
２．SK001 完掘状況
３．SK002（焼土１）遺物出土状況
４．SK002 完掘状況
５．SK003・0043 検出状況
６．SK005・SK004・SK003 完掘状況
写真図版３
１．焼土２検出状況
２．焼土２断面
３．焼土３検出状況
４．焼土３断面
５．SD001 完掘状況１
６．SD001 完掘状況２
写真図版４
１．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）東壁セクション
２．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）北壁セクション
３．遺物出土状況（20 壷底部）
４．遺物出土状況（17 壷胴部）
５．遺物出土状況（１台付甕）
６．遺物出土状況（７磨製石鏃）
７．遺物出土状況（２台付甕口縁）
写真図版５
１．遺物出土状況（15 台付甕）
２．遺物出土状況（２台付甕）
３．遺物出土状況（４壷底部）
４．遺物出土状況（４壷底部）
５．遺物出土状況
６．遺物出土状況（16 壷胴部）
写真図版６
出土遺物写真（１）　1
写真図版７
出土遺物写真（２）　1
写真図版８
出土遺物写真（３）　2
写真図版９
出土遺物写真（４）　3
写真図版 10
出土遺物写真（５）　4・5・6
写真図版 11
出土遺物写真（６）　7～14
写真図版 12
出土遺物写真（７）　15・16
写真図版 13
出土遺物写真（８）　17～20
写真図版 14
出土遺物写真（９）　21～27-3
写真図版 15
出土遺物写真（10）　28～38
写真図版 16
出土遺物写真（11）　39～57
写真図版 17
出土遺物写真（12）　58～62
写真図版 18
出土遺物写真（13）　63～75

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成 28 年７月、登り坂石油株式会社　代表取締役社長　渡邉良孝氏（以下工事主体者）によって南都留郡富士河口湖町河口字滝沢 549-1、550-1 にガソリンスタンドの建設工事が計画された。当該地は富士河口湖町埋蔵文化財包蔵地滝沢遺跡内に位置する。そのため文化財保護法第 93 条に従い、平成 28 年７月 15 日付けで工事主体者から山梨県教育委員会（以下県教委）へ富士河口湖町教育委員会（以下町教委）を経由して関係書類が提出された。平成 28 年７月 26 日付け、教学文第 1222 号にて試掘調査の実施が、県教委から工事主体者へ通知がなされた。これを受け、町教委が試掘調査を実施することとし、土地所有者の承諾の上で、平成 28 年９月 12 日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生時代を中心とする土器の破片などの遺物が出土し、土坑等の遺構が検出された。

試掘調査結果を踏まえ、町教委と工事主体者で埋蔵文化財の保護について協議を行った。ガソリンスタンドの店舗、給油施設、洗車施設等の範囲は、遺構確認面と掘削面の間に県教委が埋蔵文化財事務取扱要項の「別表２　記録保存のための発掘調査を要する場合の基準」で定める 30cm 以上の保護層を設けて遺構に影響が及ばないため発掘調査対象外とした。一方、ガソリンタンク埋設予定範囲の掘削予定深度は４．５ｍにも及び、試掘調査結果で検出された遺構及び遺物包含層の破壊が不可避であるため、町教委と工事主体者との協議の結果、発掘調査を行うことで合意した。発掘調査については、工



第１図　開発区域及び発掘調査範囲図

事主体者から町教委が委託を受けて実施することとし、平成 28 年 9 月 20 日付けで町教委と工事主体者との間で協定書を締結した。

調査前の状況（平成 28 年 8 月 16 日撮影）

第 2 節　発掘作業の経過

平成 28 年 9 月 26 日に発掘調査を開始し、平成 28 年 10 月 11 日に発掘調査を終了した。

9 月 26 日（月）　重機による表土掘削。遺構確認。
9 月 27 日（火）　遺構確認。調査区北西側から発掘開始。
9 月 28 日（水）　調査区全体発掘及び測量。
9 月 29 日（木）　調査区全体発掘及び測量。
9 月 30 日（金）　調査区全体発掘及び測量。
10 月 3 日（月）　調査区全体発掘。降雨のため午前中で作業を打ち切り。
10 月 4 日（火）　調査区全体発掘及び測量。
10 月 5 日（水）　調査区全体発掘及び測量。
10 月 6 日（木）　調査区全体発掘及び測量。
10 月 7 日（金）　調査区全体発掘及び測量。
10 月 10 日（月）　雨天のため現場中止。
10 月 11 日（火）　全体清掃。全景撮影。測量。撤収。

調査組織は以下のとおりである。

調査主体　　富士河口湖町教育委員会
調査担当者　杉本悠樹
作業員　　駒谷発男、鈴木俊夫、田村正和、外川昌宏、林　宏

第３節　整理作業の経過

整理作業は平成 28 年 11 月 1 日に着手し、遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、トレース及び遺構図の作成、写真整理を行い、編集作業後、平成 29 年 3 月 31 日の報告書刊行をもって終了した。これらは下記の作業体制で行った。

整理作業主体　　富士河口湖町教育委員会
整理作業担当者　杉本悠樹
作業員　　筒井眞澄、前川幸男

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

１. 富士山、御坂山地と河口湖

富士山は山梨･静岡両県にまたがり、3,776 mの標高をもつ日本の最高峰であり、数十万年前から小御岳火山、古富士火山、新富士火山の順に火山活動が継続してきた成層火山で、円錐形の独立峰の山容と広大な裾野を有する。富士山の北麓に点在する５つの湖は、富士山の火山活動により噴出した溶岩流によって堰き止められて形成された湖で、総称して富士五湖と呼ばれている。富士五湖のひとつである河口湖は、御坂山地の南麓に位置する。御坂山地は 2,000 mに迫る標高をもつ山々が連なり、山梨県の甲府盆地（富士川流域）を中心とする国中（くになか）地域と富士山麓と桂川（相模川）、多摩川流域からなる郡内（ぐんない）地域とを二分する山塊である。御坂山地はプレート移動によりユーラシア・プレートにフィリピン海プレートが押し寄せて隆起した地形である。河口湖の水面標高（平均水位）は 831.46 mを測り、富士五湖の中では最も低い標高に位置する湖で、面積 5.70㎢を有し五湖中で２番目の大きさをもつ。御坂山地や三ッ峠山などの周囲の山々に降った雨水が沢を伝わり河川となり、河口湖に注ぎ込んでいる。

河口湖は、南東岸の富士河口湖町船津から富士吉田市方面に流出する河川を有していた、あるいは湖沼ではなく河川であったが、富士山の溶岩流の流入により堰き止められて自然の排水路を失ったことにより現在のような湖沼となり、人工的な排水路が掘削される近世以前は水位の調整が不可能であった。降雨により増水すると自然蒸発による減水を待たなければならなかった。このことから湖岸の汀線は現在よりも大きく広がっており、湖畔の土地において利活用が可能な範囲は現在よりも少なかったと推測される。奈良・平安時代の段階の湖水面は現在の水位より 10 mほど高かったことが、近接する鯉ノ水遺跡（第４図 12）の試掘及び発掘調査で明らかになっている。河口湖の南岸は富士山から流入した溶岩流の末端崖からなる鋭利な地形が連続し、東・西・北岸は周囲の山の裾部が水没して曲線状の地形を呈している。河口湖の流入する河川は周囲の山々から土砂をもたらし、南岸を除く三方の湖岸には小規模な扇状地が形成された。滝沢遺跡は、河口湖の北東岸、御坂山地から南に張り出した霜山の東の裾に開けた扇状地にある。

滝沢遺跡の位置する河口湖の北東岸の地域は河口と呼ばれる地域である。梨川、西川、寺川、六首川、山の神川、鯉ノ水川の６河川が河口湖に注ぎ込み、河口湖畔では最も多くの川が存在する。河口の地名もこの状況に由来するものと考えられる。河川が多いことに比例して運び込まれる土砂の量も多く、湖岸に複数の扇状地が形成され連結している。扇状地のため砂礫が多く、江戸時代の耕作地の多くは下畑が大半を占めていたことが史料から確認できる。現在のような広大な水田の景観が成立するのは、大正時代の近代的な排水路の建設、第二次世界大戦後の土地改良事業による湖岸の干拓といった大規模な土木事業の結果であると考えられる。河口の集落は西川の左岸、寺川の右岸にあたる両河川に挟まれた平地上にある。西川は、流路によって開削された谷状地形の凹部から西にずれた山裾を流れており、左岸の集落の縁辺に堤防がみられ、大築地の小字が残ることから、集落への水害を防止するために流路の変更、護岸の操作が加えられた可能性がある。集落域は、西川よりも高い位置にあるために水利が悪く、集落域の北の河川と河岸の標高差のない地点で引水し、堰を設けている。この人口水路は、呑川（のみかわ）と呼ばれ、生活用水として利用されてきた。呑川は江戸時代の村絵図に記載されていることから、近世の段階で存在したことが明らかであるが、集落域の中心に位置する西川遺跡（第４図 － ９）において奈良・平安時代の遺物が確認されていることから、古代においても何らかの水利施設が存在したことが想定される。

２．滝沢遺跡周辺の地形

滝沢遺跡は御坂山地、三ッ峠山と連続する霜山の山麓から河口湖畔にかけての鯉ノ水川両岸に形成された東から西へ緩や

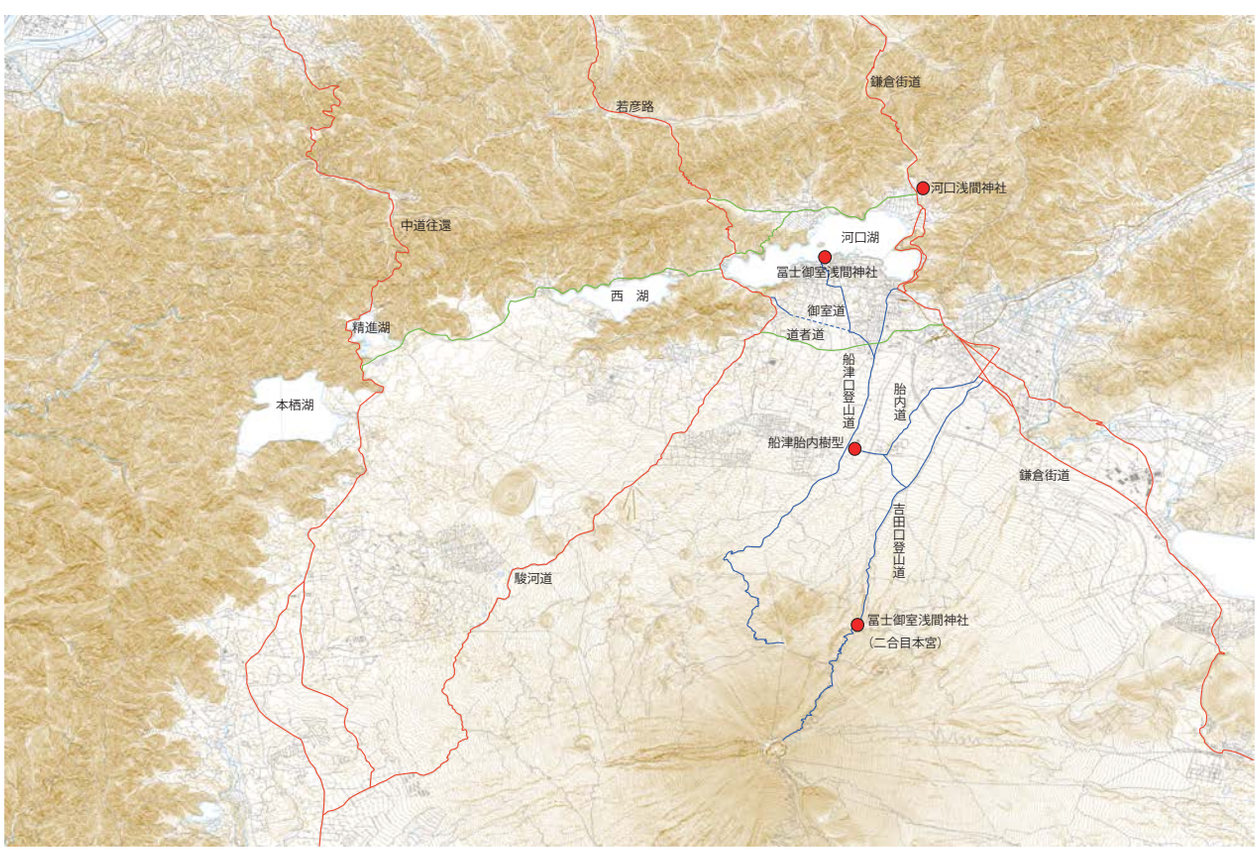
かに傾斜する扇状地上に立地しており、南端標高は 844.4 m、北端標高は 843.7 mを測る。遺跡の西方約 200 mはかつての河口湖の湖岸線であったと考えられる。南から鯉ノ水川、山の神川、六首川の河川が並び、これらの河川によって形成された小規模な扇状地が連結して河口湖に面している。鯉ノ水川はかつて滝沢川とも称されており、川の上流には滝があったという。また、鯉ノ水の地名は、滝沢遺跡の西の地点まで湖岸が迫り、鯉が産卵のために集まってきたことに由来すると伝えられ、河川の流路、湖岸に関する地名が隣接している地域である。滝沢遺跡の東に迫る霜山の山裾は急傾斜地であり、雨水の許容量を超えた際に大規模な土石流が発生した痕跡であると考えられる。そのことを証明するのが滝沢遺跡の西に隣接する鯉ノ水遺跡（第４図 - 12）である。鯉ノ水遺跡では、厚さ１mにも及ぶ砂礫層が検出され、拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。砂礫中には縄文時代から平安時代にかけての土器片が含まれており、土石流が山裾の遺跡を巻き込み猛烈な威力で流下したことを示している。この土石流で一部が流失したのが滝沢遺跡であると考えられる。

第２節　歴史的環境

１．河口湖湖畔の歴史環境

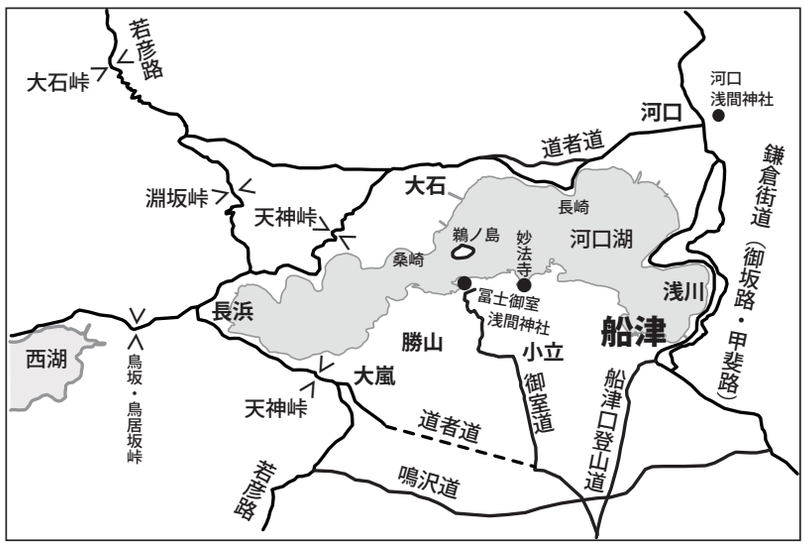
滝沢遺跡が所在する河口湖畔地域の歴史環境について、地形と交通路から見ていきたい。

前節で触れたとおり、河口湖の南岸を除く湖岸には小規模な扇状地が点在する。この扇状地に集落が形成され湖畔の村を展開してきた。東岸に浅川、北東岸に河口、北岸に大石、西岸に長浜の各村があり、現在は富士河口湖町の大字として地名が存続している。富士山の溶岩流が流入して形成された南岸にも東から船津（舟津）、小立（木立）、勝山の村々が展開した。北岸及び北東岸地域は、甲府盆地から見た場合、富士山麓の玄関口、湖水と面する地域であるとともに、急峻な御坂山地の縁辺部でもあり、山岳地形と平坦地との接点にもあたる。海をもたない甲斐国（山梨県）は、人々の生活を維持するために塩や海産物を海岸地域から移入することは不可欠であり、人口の集中する甲府盆地を起点に太平洋岸の駿河湾などに通じる道が重要な役割を果した。甲府盆地から笛吹川の支流の金川沿岸を東進し、御坂峠を越えて河口湖の北東岸の富士河口湖町河口、東岸の同町浅川、南岸の同町船津をまわり、富士吉田市、忍野村、山中湖村を東西に横断し、富士山東麓を経由して駿河湾・相模湾に至る「御坂路（東海道甲斐路、鎌倉街道）」、甲府盆地から鳥坂峠を越えて笛吹市芦川町を経て、大石峠を越えて河口湖の北岸の富士河口湖町大石、西岸の同町長浜、足和田山から南東に延びる稜線上の天神峠を越えて同町大嵐に達し、鳴沢村大田和から富士河口湖町富士ヶ嶺を経て静岡県富士宮市上井出を結ぶ「若彦路・金王路」、甲府盆地から迦葉坂・右左口峠を越えて甲府市古関町を通り、阿難坂（女坂）を越えて精進湖の北岸の富士河口湖町精進（居村）に達し、精進湖



第２図　富士河口湖町を経由する歴史の道

西岸から青木ヶ原樹海を南下して同町本栖、富士ヶ嶺を経て静岡県富士宮市上井出にて若彦路・金王路と合流してさらに南下し、同県富士市の駿河湾岸に至る「中道往還」の３つの経路が甲府盆地から御坂山地を経て太平洋岸に連絡する道として知られている。これらの道は、甲斐国（山梨県）に住む人々が塩や海産物を獲得するために必要不可欠な交通路であった。このうち、「御坂路（東海道甲斐路、鎌倉街道）」、「若彦路・金王路」が河口湖畔を経由しており、河口湖畔は甲斐国（山梨県）が歴史を積み重ねるうえで重要な地域であるといえる。



第３図　河口湖周辺の歴史の道

２．河口湖北東岸の歴史環境

本遺跡が位置する河口湖北東岸を中心とした地域の歴史環境について時代を追いながら見ていきたい。

最も古い遺跡として、縄文時代早期の遺物が出土し、柱穴や炉跡が検出された河口の谷抜（かまぬけ）遺跡（第４図 - ５）があげられる。谷抜遺跡は、寺川左岸の段丘上の傾斜地に立地している。この遺跡は、縄文時代前期・中期・後期の遺物も出土しており、周辺に当該期の集落遺跡が存在し継続していた可能性がある。谷抜遺跡の南には稜線を挟んで塚越遺跡（第４図 - ６）がある。塚越遺跡では、縄文時代後期の柄鏡形敷石住居跡が１軒検出されている。縄文時代後期、弥生時代、近世の生活面が確認されている。縄文時代後期の遺跡は、塚越遺跡の南に位置する炭焼遺跡（第４図 - ７）、さらに南に位置する井坪遺跡（第４図 - ８）も知られている。縄文時代晩期の遺跡では、河口湖の湖中にあるウノシマ遺跡（第４図 - 19）が知られている。縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器が連綿と出土しており、時代の変遷を考察するうえで重要な遺跡である。弥生時代の遺跡は、本書の滝沢遺跡（第４図 - 25・第５図）Ⅳ区で平成 21 年度に実施された第２次調査において、方形周溝墓が検出されており富士北麓では希少な事例である。古墳時代前期の遺跡は、本書の滝沢遺跡、東岸の浅川の宮ノ下遺跡（第４図 - 23）において当該期の土器が出土している。古墳時代中期の遺跡で注目されるのは、疱橋（もばし）遺跡（第４図 - ３）である。御坂峠の南の平坦地から山間地に転換する地域にあり、御坂路（東海道甲斐路、鎌倉街道）の沿道にあたる地点で当該期の坏形土器が完形で出土している。峠を越える際の通過儀礼にかかわる祭祀遺物と考えられる。同期の遺跡では鯉ノ水遺跡（第４図 - 12）において、坏形及び甕形土器がまとまって出土している。同遺跡の西端部から遺物が集中して出土しているが、奈良・平安時代には湖水域であったと考えられる地域であり、時代により河口湖の水位変動があったことを示す事例である。奈良時代に入ると、東海道甲斐路がこの地域に敷設されたことに伴い、沿道に遺跡が展開する。河口の集落のほぼ中央に位置する西川遺跡（第４図 - ９）では、８世紀中ごろの須恵器の坏形土器の側面に「川」と記銘された墨書土器が出土しており、『延喜式』に記載された東海道甲斐路の３駅のひとつである「河口駅」に関連する遺跡として考えられる。この遺跡では、須恵器の壺形土器の破片を二次的に使用した転用硯や墨痕の付着した土器片が多数出土しており、駅の主体である駅家につながる可能性がある。鯉ノ水遺跡（第４図 - 12）では、東海道甲斐路の道路遺構が山梨県内で初めて発見された。推定幅６メートルの遺構で、版築工法により強固に築かれた道路面が検出されている。鯉ノ水遺跡の東方に近接して本書の滝沢遺跡（第４図 - 25）がある。これまでの４次にわたる発掘調査の結果、38 棟に及ぶ竪穴建物跡が検出され、これらの遺構は東海道甲斐路の線形に従い共通する軸線方向を有し、計画的に営まれた集落であると考えられる。墨書土器も多数出土していることから知識層の介在が想定され、「河口駅」を支える駅戸の集落として捉えられる。前節でも触れたとおり、滝沢遺跡、鯉ノ水遺跡周辺では平安時代に大規模な土石流災害があったことが確認されている。土石流は滝沢遺跡の住居跡等の遺構を破壊しながら西へ流下し、鯉ノ水遺跡において東海道甲斐路の道路を一部破壊し被覆している。土石流の砂礫中に含まれる土器の年代の下限が平安時代の 10 世紀初頭のものであり、当該期の土石流であることが判明している。この土石流によって被災した道路遺構が平安時代以前のものであることを立証することとなった。河口には、貞観６年（864）の富士山の噴火に際して朝廷の命を受け翌年建立されたと考えられる河口浅間神社があり、平成 23 年（2013）史跡に指定され、平成 25 年（2013）には世界文化遺産富士山の構成資産に登録されている。

中世に入ると、東海道甲斐路は、甲斐国から幕府が開かれた鎌倉に通じる道、鎌倉街道として機能が継承される。また、富士信仰の道者の参詣路としての役割も担い、甲府盆地及び中部、西関東地域の道者が多く通行した。河口には道者が寄宿する宿坊を営み、加持祈祷を行う御師が集住した。河口は砂礫を主体とした沖積地であり、耕作地としての条件が悪く農業

1．御坂峠・御坂城跡（中近世）　2．イタドリ沢遺跡（弥生）　3．疱橋遺跡（縄文～近世）　4．宮ノ上遺跡（平安～中世）　5．谷抜遺跡（縄文～近世）　6．塚越遺跡（縄文・弥生）
7．炭焼遺跡（古墳・平安）　8．井坪遺跡（縄文・平安）　9．西川遺跡（奈良～近世）　10．大築地遺跡（縄文）　11．金山遺跡（縄文）　12．鯉ノ水遺跡（奈良・平安）
13．追坂遺跡（縄文）　14．広瀬の古城山（中世）　15．大石の城山（中世）　16．大石遺跡（縄文）17．水木原遺跡（縄文）　18．大石鐘つき戸（中世）　19．ウノシマ遺跡（縄文～古墳）
20．里宮遺跡（縄文）　21．宝司塚遺跡（弥生）　22．梨宮公園遺跡（縄文）　23. 宮の下遺跡（古墳）　24．老坂遺跡（縄文）　**25．滝沢遺跡（縄文～平安）**

第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡

生産力は低かった。続く近世には記録から 1,000 人を超える人口がいたと読み取れるが、石高は 300 石程度であり、村の需要に生産力が見合わない状況である。富士山御師は、開山期以外の時期に個々の御師が所持する檀那場を廻り、加持祈祷や配札を行いその見返りとして穀物や金銭を得ていた。御師の檀那廻り（廻旦）は、地域の農業生産力の低さを補填するものであったと考えられる。中世には河口左衛門が当地を支配していたと伝えられているが、その居館である河口氏屋敷が西川遺跡（第４図 － ９）に比定されている。しかし、河口氏を祀る河口神社は善応寺の西の寺川右岸にあり、ここを屋敷地とする説、集落の北東の字北浦に存在する五輪塔群を河口氏墓所とする伝承から、その周辺を屋敷地跡とする説などがあり、比定地は一定しない。

戦国期には、甲府盆地を拠点とする武田氏と郡内（山梨県東部）を拠点とする小山田氏との対立により、河口が武田信虎の侵攻の際に焼き討ちされたことが『勝山記』に記録されている。また、当地を治めていた河口氏が地下衆によって討たれたことも同書に記されている。天正 10 年（1582）の天正壬午の乱では、甲府盆地に陣を構えた徳川家康軍に対し、郡内を占拠していた相模の北条氏政軍が鎌倉街道を通じて甲府盆地に進軍し、街道の要衝である御坂峠に東西 500 mに及ぶ御坂城（第４図 － １）を修築し、徳川軍を牽制した。

近世には、12 軒の御師を祖とする富士山御師が分家を進め、江戸時代後期の最盛期には 120 人もの御師が存在したことが古文書から読み取ることができる。河口浅間神社に面する鎌倉街道の沿道には宿坊が軒を連ね、短冊状の地割が現在まで継承されている。

明治時代以降、近代化の波及により、日本各地に鉄道網が整備され、山梨県内には中央本線が敷設された。中央本線の開通により富士山の参詣者は甲府盆地から大月を経由して馬車鉄道、のちの富士山麓電気鉄道で上吉田に至るようになり、鎌倉街道を通じて御坂峠を越えて河口を訪れるルートは急速に衰退した。このため明治時代後半から御師の廃業が進み、御師集落としての歴史に幕を下ろす。また、河口湖には県庁隧道や東京電力鹿留発電所嘯放水路が設けられ、人工的な湖水の水位を調整することが可能となった。このため、河口湖岸の土地の利活用が可能となり、土地改良事業による干拓と合わせ耕地が拡張されていく。本書の滝沢遺跡周辺は水田や畑地として利用され、近年ではブルーベーリー農園が霜山の裾部に展開していた。平成 22 年（2010）の国道 137 号河口２期バイパスの供用開始により、旧国道 137 号は主要幹線道路としての役目を終え、沿道は歴史的景観を留める静穏な地域となった。また、バイパス周辺は宅地や商業地化が進んでいる。

３．滝沢遺跡周辺の調査事例

山梨県県土整備部が実施した南都留郡富士河口湖町河口地区内における一般国道 137 号河口２期バイパス及び吉田河口湖バイパス建設工事に係り、平成 14 年（2002）以降、山梨県埋蔵文化財センターが調査を継続してきた。上記道路建設は河口湖周辺地域および富士吉田市内の渋滞緩和及び富士山噴火や地震等災害時の避難経路の確保を目的としている。河口２期バイパスは国道 137 号河口湖大橋北詰以北を東に迂回する延長 3.2㎞の２車線道路で、平成 22 年（2010）12 月 16 日に供用開始となっている。一方、吉田河口湖バイパスは、富士吉田市新倉から富士河口湖町河口までの延長 3.0㎞の２車線道路で、途中、新倉河口湖トンネル（2,476m）を抜けて富士河口湖町河口地内にて河口２期バイパスに接続し、平成 27 年（2015）３月 27 日に供用が開始された。

河口２期バイパス建設工事に先立ち、平成 14 年度には河口湖大橋北側の延長約 2.5㎞部分に対して試掘調査が実施され、滝沢遺跡の範囲追加（第４図 － 25）及び塚越遺跡（第４図 － ６）・炭焼遺跡（第４図 － ７）・井坪遺跡（第４図 － ８）の４遺跡が確認され、翌平成 15 年度～ 16 年度にかけて塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の発掘調査を実施し、平成 17 年（2005）３月には発掘調査報告書が刊行されている。

滝沢遺跡（第４図 - 25）に関しては、平成 17 年（2005） ５月から 11 月まで第１次発掘調査が実施されている。その間、河口２期バイパス北端部では新規の埋蔵文化財包蔵地である疱橋遺跡（第４図 － ３）が発見され、建設工事に伴い破壊される範囲に対して発掘調査が実施された。翌平成 18 年（2006） ５月からは前年２月に行った試掘調査により新規発見された谷抜遺跡（第４図 － ５）の発掘調査が実施され、翌平成 19 年（2007） ８月には滝沢遺跡・疱橋遺跡・谷抜遺跡の発掘調査報告書が刊行された。

一方、吉田河口湖バイパス建設に伴い、平成 20 年（2008）12 月に河口２期バイパス建設用地のうち未買収であった区域と、河口湖側抗口からバイパス本線区間および本線に北接して建設されるトンネルに関連する電気施設予定地の約 5,900㎡に対して試掘調査を実施した。その結果、試掘調査対象地全域に及び縄文時代から平安時代にかけての遺物包含層と古墳時代から平安時代の文化層（２層） １面が確認され、約 5,900㎡の発掘調査が実施された。

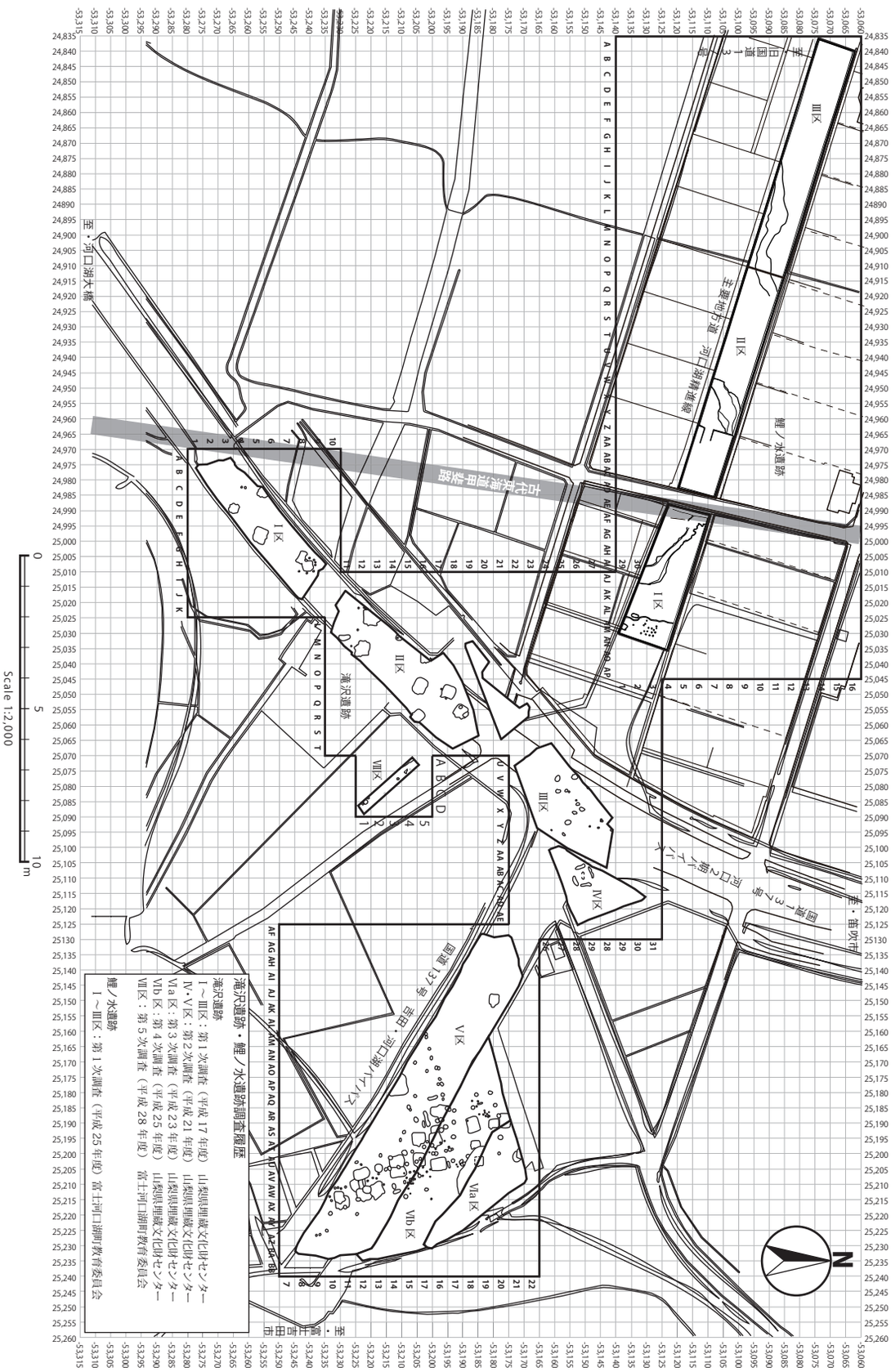
以上の経過を受けて、県教育委員会学術文化財課および県土整備部富士東部建設事務所・吉田支所にて協議を行い、平成21年（2009）度以降に発掘調査を河口２期バイパス建設用地の未買収区域およびバイパス本線部分と電気施設部分の２回に分けて実施することとなり、平成21年には第２次発掘調査が実施された。なお、調査区域は、河口２期バイパスに伴う調査にて付されたⅠ～Ⅲ区に連続して、河口２期バイパス建設用地で未買収区域をⅣ区、バイパス本線部分をⅤ区、電気施設部分をⅥ区とし、第２次調査はⅣ区とⅤ区、第３・４次調査はⅣ区に該当する。また、Ⅳ区は工事工程の関係より、さらに２年次に分けて発掘調査を実施することとなり、平成23年（2011）の第３次調査区域をⅥａ区、平成25年（2013）の第４次調査区域をⅥｂ区と設定している。なお、滝沢遺跡第２次発掘調査の報告書は平成24年（2012）３月に刊行されている。

Ⅴ・Ⅵ区では、山に近い東部域は霜山から流れ込む土砂が堆積し、西側には一部に礫を主体とする砂礫層を確認されている。調査の結果、８世紀末～10世紀後半に帰属する竪穴建物跡38棟が発見されている。Ⅴ・Ⅵ区で発見された建物跡の主軸方向は、ほぼ一様に南北方向に向くことが確認され、古代官道の路線に影響を受けている可能性がある。出土遺物としては、墨書・刻書土器が多く伴出しており、集落における識字層の存在が想定される。また、「本人」と記された墨書・刻書土器が多いことは、滝沢遺跡の示す特徴の一つである。そのほか、遺構外のまとまった場所から製塩土器が見つかっており、計41点／総重量160gを量る。Ⅴ区では、相模型甕（Ⅴ区３号住居）や武蔵型甕（同６号住居）、いわゆる信州系と呼ばれる内黒土器（同５号住居）などの他地域に出自を持つ土器が数多く出土している。Ⅴ区の調査を担当した小林健二氏は、こうした状況から「まさに交通の要衝と呼ぶにふさわしい地域」と評価している。Ⅵ区では、竪穴建物跡SI07から硯として二次使用した痕跡が残る灰釉陶器が出土している。この灰釉陶器の見込み部には朱墨とみられる朱色物質が付着しており、朱硯として利用されていたようである。当時の朱墨の用途が寺院における経典の注釈や公的施設における荷物の検閲などに限定されることから、多量の墨書土器の出土により示唆されていた官衙的要素をより色濃く反映するものであり、駅家に関連する機能・性格を有した集落であったことが想定される。

従来、古代官道沿いに営まれた集落跡として、交通の要衝としての性格が評価されていたが、第４次調査段階において製塩土器の存在が確認されたことに加え、朱硯として利用された灰釉陶器が出土したことにより、本遺跡における公的施設の影響がより濃厚であったことが明らかになってきている。

滝沢遺跡と密接な関係をもつのが、西に100ｍほどの位置に所在する鯉ノ水遺跡（第４図 - 12）である。鯉ノ水遺跡の発掘調査は、国道137号吉田河口湖バイパスを河口湖畔まで延伸する道路として計画された主要地方道河口湖精進線の建設に先立って平成25年（2013）７月～８月に行われた。遺跡を南北に町道2101号が縦断し、町道から東をⅠ区、町道の西をⅡ区、Ⅲ区と調査区域を設定した。このあたりは、御坂山地の南麓で、河口湖の北東部の標高840m前後に立地しており、周囲には水田が広がっている。幅約15m、長さ200mにわたる調査範囲は、東の山地から徐々に西に向かって河口湖のほとりへと穏やかに傾斜した地形にあり、東では山からの運ばれてきた土砂、西では河口湖の湖水によってもたらされた砂や泥が堆積していた。Ⅰ区では、地表下約１ｍの層から中世末から近代頃まで使われていたと推測される旧鎌倉往還の道路遺構１条、地表下２ｍの層から古代東海道甲斐路の道路遺構１条、土坑３基、土石流・流路跡１条、時期・用途不明の硬化面１条が、Ⅱ区では、土石流の流路跡１条が、Ⅲ区では地表下約２ｍの層から古墳時代中期の土器が集中する包含層がそれぞれ発見された。町道2101号は旧鎌倉往還の伝承があり、この道路に平行して道路遺構が上下に２条発見されたことから、古代以降継続的に似た線形の道路が繰り返しつくられてきたことが分かった。古代東海道甲斐路の道路遺構は、山梨県内で初の発見であり、古代甲斐国の成立を考えるうえで重要な手掛かりが得られた。古代東海道甲斐路の道路遺構は、土石流によって一部が破壊されていた。その土石流の砂礫には、古墳時代から平安時代にかけての土器の破片が多く含まれ、遺跡の東にある山から発生した土石流が滝沢遺跡周辺の集落遺跡を押し流しながら下ってきたものと考えられる。含まれる土器の中で一番新しいものが平安時代の10世紀初頭のものであることから、土石流はこの頃発生したものと考えられる。古代東海道甲斐路は、この時点で一時使用ができなくなった可能性がある。強烈な勢いで土器が押し流されたために、土器の割れ口は非常にきれいな状態で発見された。

Ⅱ区では、Ⅰ区の道路遺構を破壊した土石流の流路の続きが見つかり、土石流の砂礫の中には大量の土器の破片が混ざっていた。一部、古墳時代の土器も含まれるが、多くは奈良～平安時代の土器である。土器に墨で文字が記された墨書土器や先のとがった道具で文字などを記した刻書土器もみられ、やはり滝沢遺跡周辺の集落遺跡の一部が押し流されたことが想定される。土器の破片は、Ⅰ区と同じように割れ口がきれいなままのものと、すり減っているものとに分かれ、土石流により猛烈な勢いで押し流されてきたものと考えられる。また、土器とともに馬の歯が多く見つかった。土器などの遺物とともに流されてきたものと考えられるが、鯉ノ水遺跡や滝沢遺跡の周辺で馬が飼われていたことが想像され、馬を常駐させていたと考えられる河口駅との関わりも注目される。駅に常駐させるための馬を飼育する場所が近くにあった可能性も考えられる。



第５図　滝沢遺跡周辺の発掘調査地点

Ⅲ区は、調査で最も西に位置し河口湖に近い地点である。地層を観察すると湖の底で堆積した砂層などがあり、かつては湖の一部だった可能性が考えられる。Ⅰ区で発見された古代東海道甲斐路の道路遺構が使われていた当時、Ⅲ区は湖水だったと推測されるが、地表面からおよそ２ｍの深さに古墳時代中期（５世紀半ば～後半）の土器が集中して発見された。古墳時代は奈良・平安時代よりも河口湖の水位が低かった可能性がある。発見された土器は、Ⅰ区やⅡ区のように土石流などによって運ばれてきたものではなく、土器をその場に置いたか廃棄したとみられ、もともとの形が分かる程度に復元できるものが多くあった。河口湖のほとりの水辺で何らかの祭祀をし、その際に土器をそなえたとも考えられる。

Ⅰ～Ⅲ区の全体の調査を通して、古代東海道甲斐路が河口湖の湖畔に面した湿地につくられ、弱い土地の上に頑丈な道路をつくるために版築工法が採られていたこと、その頑丈な道路が土石流によって破壊されたという災害の歴史を知ることができた。また、河口湖の水位は時代によって増減があることもわかり、かつての鯉ノ水遺跡の周辺の環境や景観を復元することができる。さらには、近くにある滝沢遺跡が古代東海道甲斐路と密接なかかわりをもつ遺跡であることもとらえることができた。

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

試掘調査は、平成 28 年（2016）９月 12 日に着手し、任意寸法のトレンチを３箇所（第１～３トレンチ）設定して調査を行い、地表以下約 100cm で弥生時代を主体とする遺物包含層を検出した。試掘調査は同日中に終了している。

調査結果を基に遺跡の保存協議を行った結果、ガソリンタンクを埋設する範囲以外は掘削深度が包含層の保護に影響がないことを確認し、ガソリンタンクが埋設される予定範囲（約 90㎡）について本調査を実施することとした。

発掘調査は、平成 28 年（2016）９月 26 日から着手した。

第２節　層序

調査区は霜山西麓の扇状地の傾斜地に位置し、周辺の地形は東から西へゆるやかに傾斜している。調査区全体の堆積状況は、霜山から流された砂礫やスコリアを含む層が複数層確認された。表土は耕作のために運び込まれた客土と考えられ、一部水田の床土と見られる鉄分を含む層位も認められた。度重なる土石流のため、表層が流失したことにより客土が持ち込まれたと推測される（第６図）。

第３節　遺構

１．土坑

SK001 土坑（第８図・第１表・写真図版２）

形状・規模　Ａ４・Ｂ４グリッドに位置する。試掘時に設定したトレンチにより西半分を欠損している。不整形の土坑で、南北約１ｍ 40cm ×東西約 90cm を測る。遺構確認面からの掘り込みは約 15cm で、壁は緩やかに立ち上がる。

重複　遺構の重複はみられない。

覆土　暗茶褐色のシルト質土。

遺物　覆土中から 11 点の土器片が出土している。このうち、第 18 図の 36・37 の遺物が実測し得た。土器片の出土レベルは土坑の底面よりも高い位置にあり、土坑周辺から出土した土器片に同一個体と見られるものが散見するため、土坑に伴う遺物ではなく覆土に混入したと捉えられる。

SK002 土坑・焼土１（第９図・第１表・写真図版２）

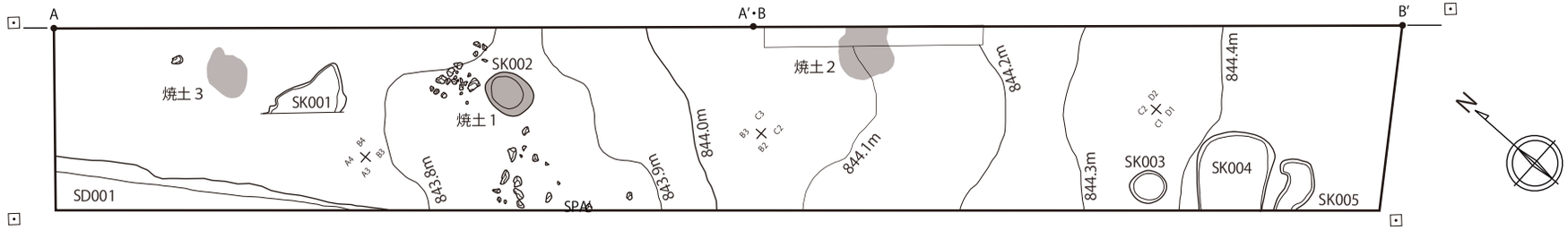
形状・規模　Ｂ３グリッドに位置する。楕円形の土坑で、南北約 90cm ×東西約 70cm を測る。遺構確認面からの掘り込みは約 25cm で、壁は緩やかに立ち上がる。

重複　遺構確認面のレベルで覆土に焼土が認められ、焼土１として扱う。

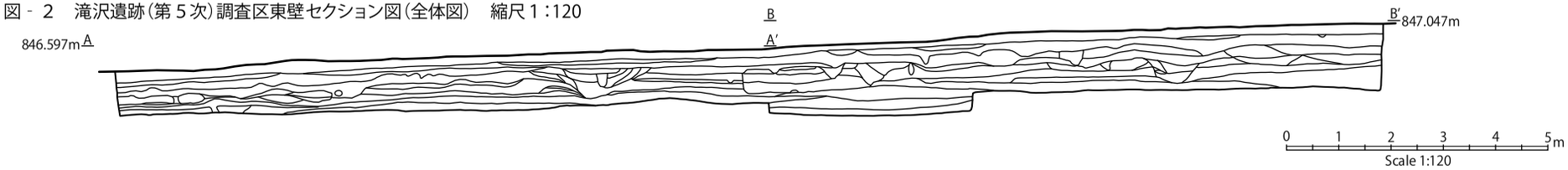
覆土　暗茶褐色のシルト質土。

遺物　覆土表面の焼土の中から 12 点の土器片が出土している。いずれの土器片も遺構外から出土した土器片と接合関係があり、この土坑を中心に礫の分布が認められることから屋外の炉である可能性も示唆される。明確なプランを確認し得なかったため、土坑に伴う焼土として認識する。

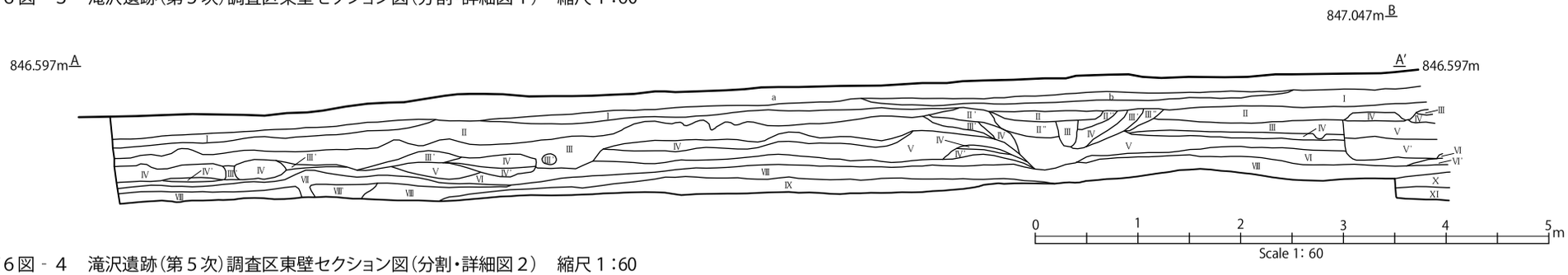
第６図 - １　滝沢遺跡（第５次）調査地点平面図（セクション計測地点図）　縮尺１：120



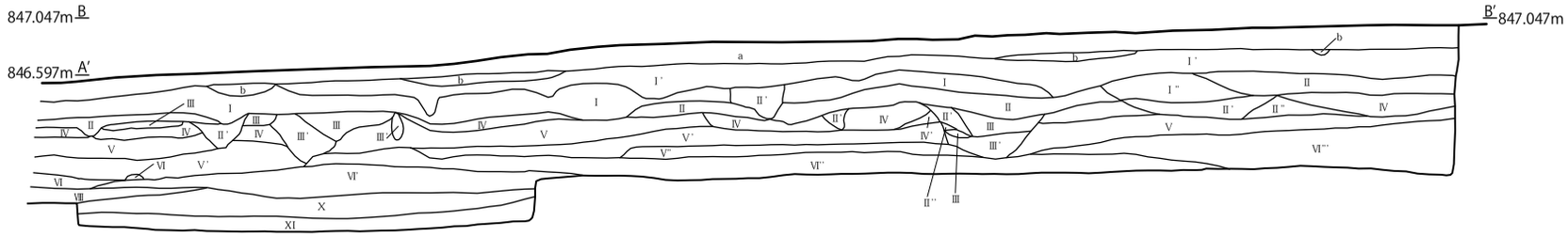
第６図 - ２　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（全体図）　縮尺１：120



第６図 - ３　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（分割・詳細図１）　縮尺１：60

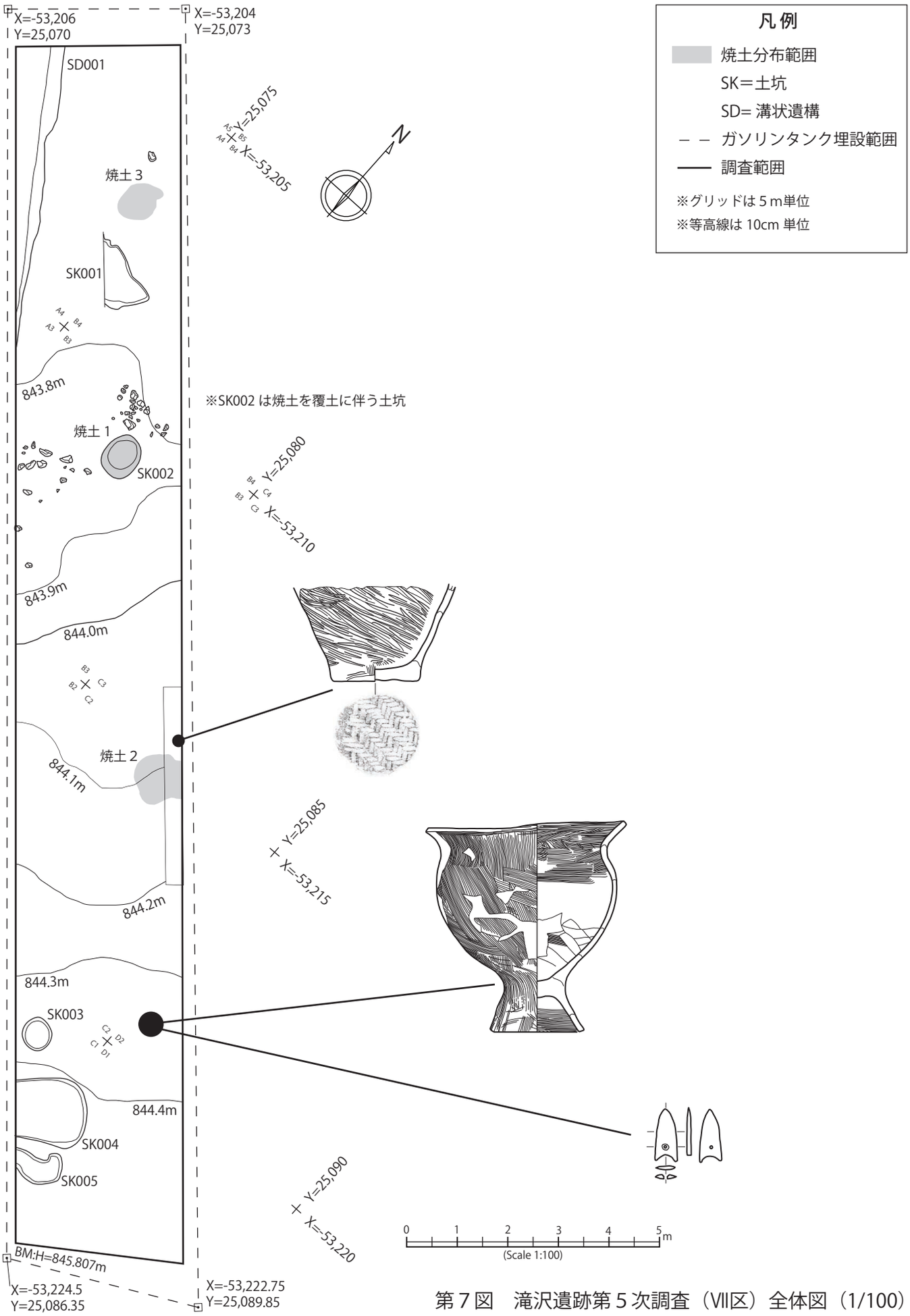


第６図 - ４　滝沢遺跡（第５次）調査区東壁セクション図（分割・詳細図２）　縮尺１：60

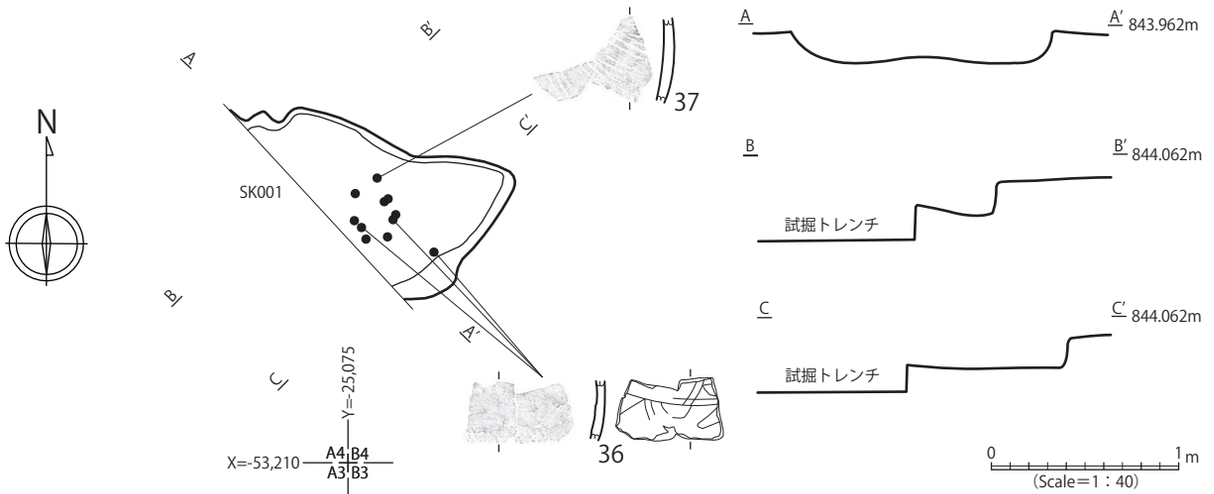


土層注記
a：客土１・暗灰褐色土・耕作土　b：客土２・黄褐色土・耕作土（水田床か）　Ⅰ層：暗茶褐色土・砂礫を含む　Ⅰ'層：Ⅰ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる　Ⅱ層：茶褐色土・赤色粒子を若干含む　Ⅱ'層：Ⅱ層に類似するがスコリアの含有量が多い点で異なる
Ⅱ"層：Ⅱ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる　Ⅲ層：暗茶褐色土・スコリア粒子を含む　Ⅲ'層：Ⅲ層に類似するがスコリアの含有量が多い点で異なる　Ⅲ"層：Ⅲ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる　Ⅳ層：黒褐色土・スコリア層・砂礫粒子を若干含む
Ⅳ'層：Ⅳ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる　Ⅴ層：暗灰褐色土：砂礫層　Ⅴ'層：Ⅴ層に類似するがスコリアの含有量が多い点で異なる　Ⅴ"層：Ⅴ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる　Ⅵ層：暗黄褐色土・シルト質（遺物包含層）
Ⅵ'層：Ⅵ層に類似するがスコリアの含有量が多い点で異なる（遺物包含層）　Ⅵ"層：Ⅵ層に類似するが砂礫の含有量が多い点で異なる（遺物包含層）　Ⅵ'"層：Ⅵ層に類似するがシルト質の粘性が弱い点で異なる（遺物包含層）　Ⅶ層：暗黄褐色土・シルト質
Ⅷ層：暗茶褐色土・シルト質　Ⅸ層：暗茶褐色土・シルト質・砂礫層　Ⅹ層：灰褐色土・砂礫層　Ⅺ層：暗茶褐色土・シルト質

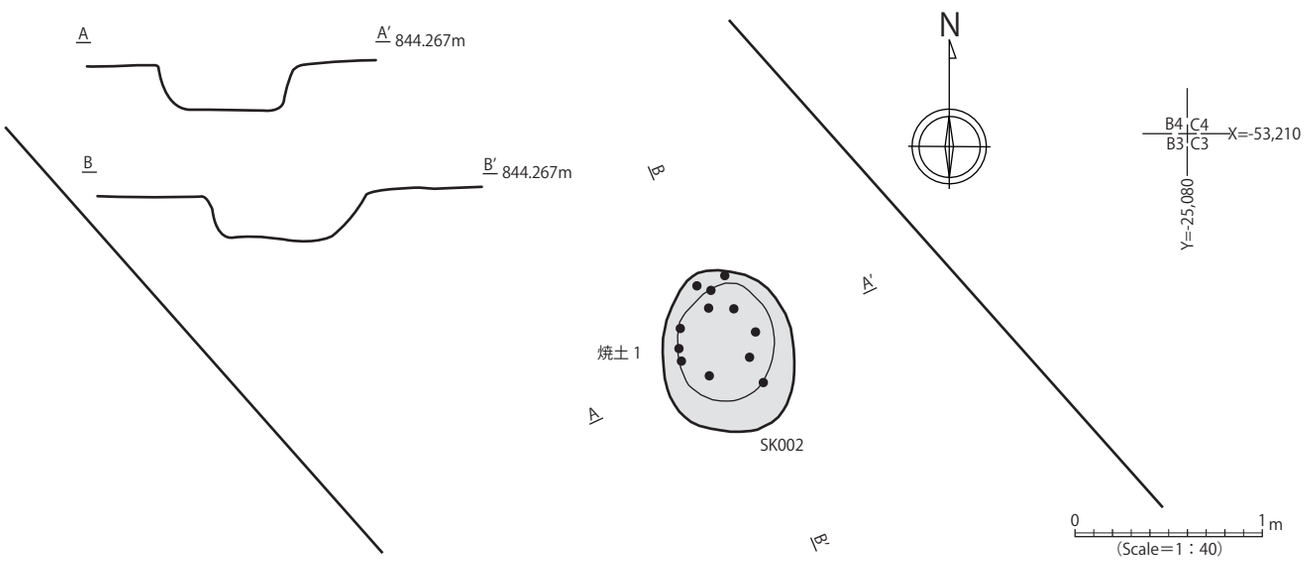
第６図　滝沢遺跡（第５次）　基本層序図（セクション図）



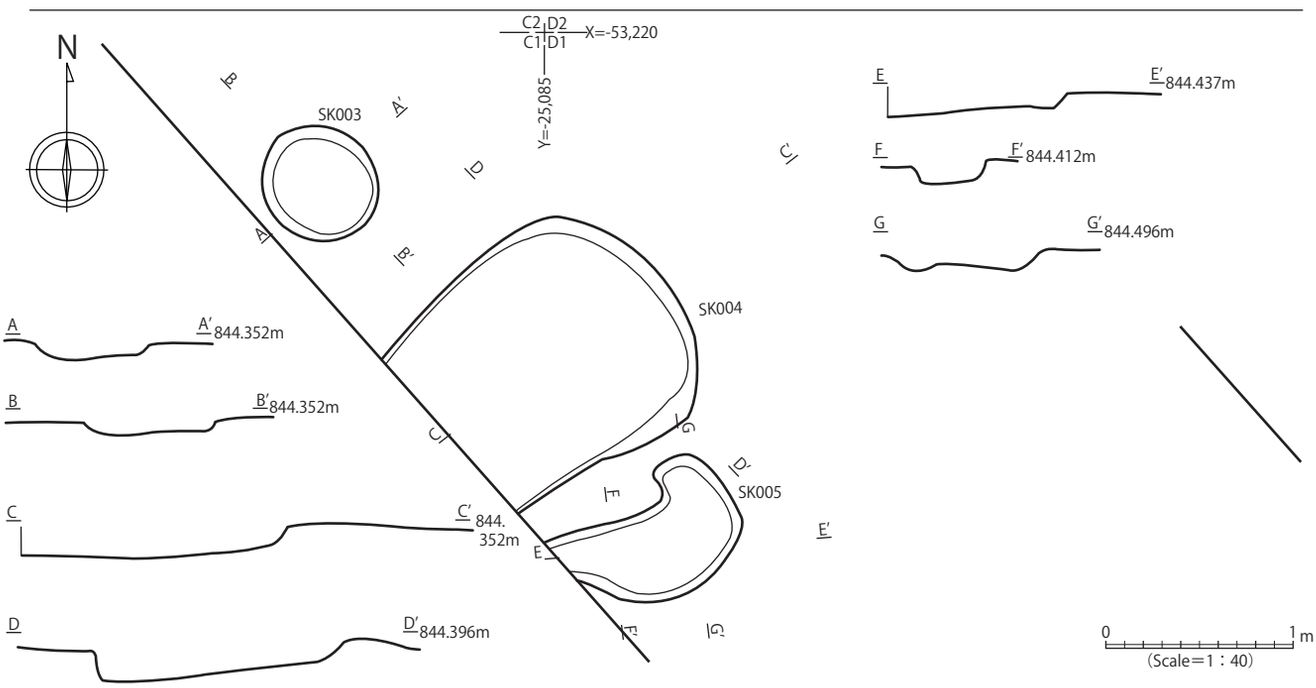
第 7 図　滝沢遺跡第 5 次調査（Ⅶ区）全体図（1/100）



第８図　SK001 土坑　平面図・断面図



第９図　SK002 土坑・焼土 1　平面図・断面図



第 10 図　SK003・004・005 土坑　平面図・断面図

SK003 土坑（第 10 図・第 1 表・写真図版 2）

形状・規模　Ｃ１グリッドに位置する。ほぼ円形の土坑で、南北約 65cm ×東西約 60cm を測る。遺構確認面からの掘り込みは約 15cm と浅く、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土　暗茶褐色のシルト質土。

遺物　覆土上面から第 16 図 15 の古墳時代前期に位置付けられる大型の甕が出土している。遺構を確認する前の段階で上層から出土しており、遺構に伴うものではないと考えられる。

SK004 土坑（第 10 図・第 1 表・写真図版 2）

形状・規模　Ｃ１・Ｄ１グリッドに位置する。隅丸方形に近い形状の土坑で、南西側は調査区域外に及んでいるため全容は明らかではない。南北約 1 m 50cm ×東西の検出幅は約 1 m 40cm を測る。遺構確認面からの掘り込みは約 20cm で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土　暗茶褐色のシルト質土。

遺物　覆土上面から第 15 図 2 の古墳時代前期に位置付けられる北陸系の壷の上半部が出土している。遺構を確認する前の段階で上層から出土しており、遺構に伴うものではないと考えられる。

SK005 土坑（第 10 図・第 1 表・写真図版 2）

形状・規模　Ｃ１・Ｄ１グリッドに位置する。不整形の土坑で、南西側は調査区域外に及んでいるため全容は明らかではない。南北約 75cm ×東西の検出幅は約 1 m 5 cm を測る。遺構確認面からの掘り込みは約 20cm で、壁は緩やかに立ち上がる。

重複　遺構の重複なし。

覆土　暗茶褐色のシルト質土。

遺物　覆土上層から土器片が 1 点土しているが図示し得なかった。

２．焼土

焼土１（第９図・第２表・写真図版２）

※ＳＫ 002 と重複。

焼土２（第 11 図・第２表・写真図版３）

形状・規模　Ｃ２グリッドに位置する。北東側は調査区域外に及んでおり全容は明らかではない。検出規模は、南北約 1 m ×東西約 1 m10cm である。不整形の範囲に分布している。

覆土　被熱した土層は約３～５cm 程度である。

遺物　焼土の範囲内から３点の土器片が出土している。このうち第 20 図 74 は壷の胴部の破片である。この焼土の北西に近接した調査区域の際から第 15 図 4 の壷の底部が逆位で出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。

焼土３（第 12 図・第２表・写真図版３）

形状・規模　Ａ４グリッドに位置する。楕円形に近い不整形の範囲で分布している。検出規模は、南北約 90cm ×東西約 70cm である。

覆土　被熱した土層は約 5 cm 程度である。

遺物　焼土の範囲内から６点の土器片が出土している。焼土の範囲よりも南の区域で土器片がまとまって出土している。炉として使用された可能性も示唆される。

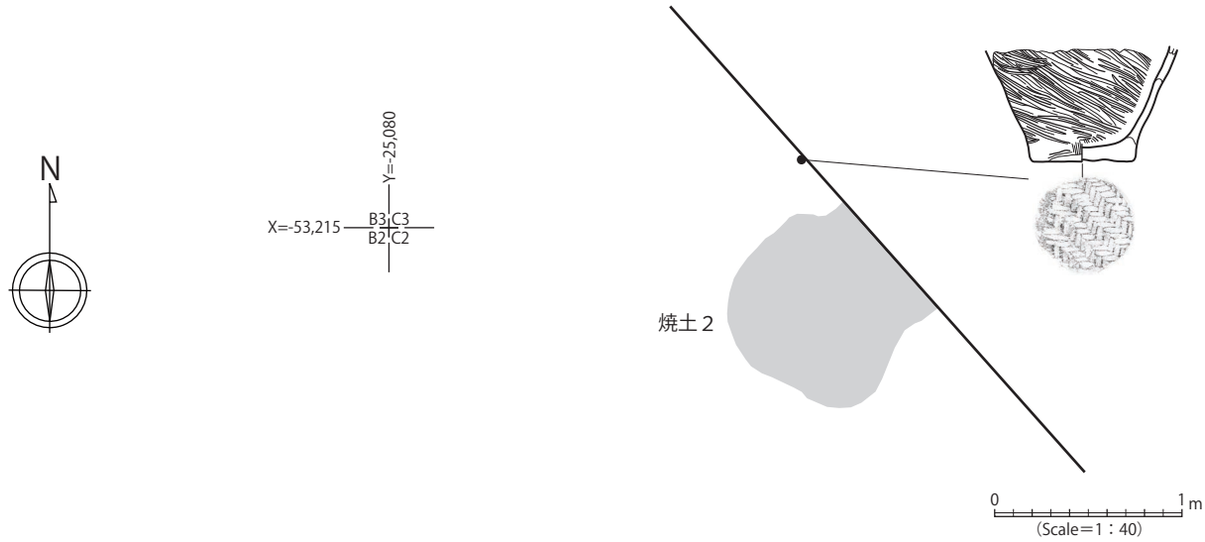
３．溝状遺構

SD001 溝（第 13 図・第３表・写真図版３）

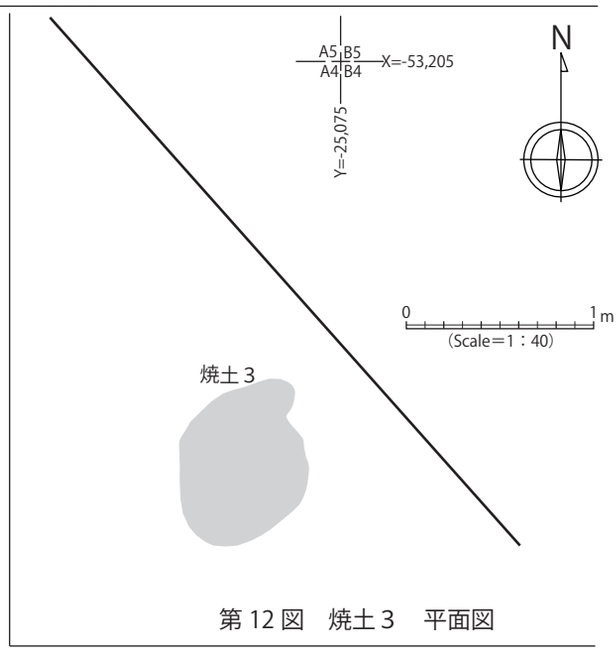
形状・規模　Ａ３・Ａ４グリッドに位置する。北西及び南西側は調査区域外に及んでおり全容は明らかではない。検出規模は、最大幅約 95cm ×最大長約５．５m である。薬研ないし V 字状の掘り込みをもつ。確認面からの深さは約 0.5 mを測る。調査区域の壁の断面観察により、この溝に関連する砂礫の堆積は約 1 mに及ぶことが確認された。

覆土　砂礫を主体とする黒褐色土。

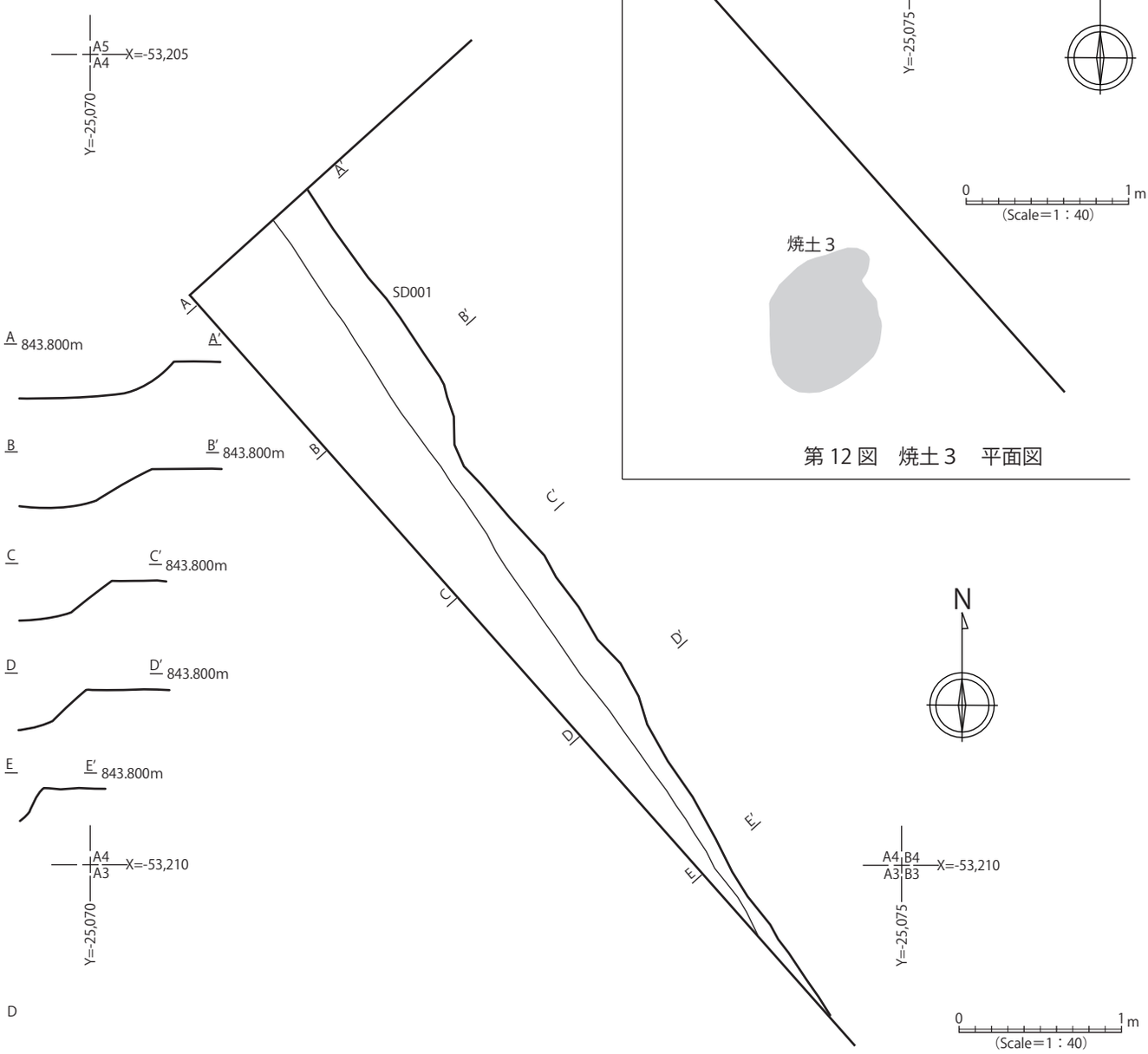
遺物　覆土の砂礫中から平安時代に位置付けられる土師器の破片が出土した。土石流等により本調査区域の南方から運ばれたと考えられ、霜山西麓の扇状地に存在した古代の集落跡の一部が破壊された可能性が示唆される。平成 25 年（2013）の鯉ノ水遺跡の発掘調査で検出された土石流の流路跡との関連性も考えられる。



第 11 図　焼土２　平面図



第 12 図　焼土３　平面図



第 13 図　SD001 溝　平面図・断面図

第１表　土坑計測表（第８・９・10 図）

土坑番号	グリッド	形状	径（cm）	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	遺物	備考
SK001	A4・B4	（不整形）	―	140	（90）	15	36・37	
SK002	B3	楕円形	―	90	70	25	6・25・34 ほか	焼土１と重複
SK003	C1	円形	60	―	―	15	15	
SK004	C1・D1	（隅丸方形）	―	（140）	150	20	2・31・33・50	
SK005	C1・D１	（不整形）	―	（105）	75	20		

※・・・形の（　）は推定形、長軸・短軸の（　）は現存または検出値

第２表　焼土計測表（第９・11・12 図）

焼土番号	グリッド	形状	長軸（cm）	短軸（cm）	遺物	備考
1	B3	楕円形	90	70	6・25・34 ほか	SK002 と重複
2	C2・C3	（不整形）	（110）	100	74	
3	A4	不整形	90	90	64	

※・・・形の（　）は推定形、長軸・短軸の（　）は現存または検出値

第３表　溝状遺構計測表（第 13 図）

溝番号	グリッド	断面形状	最大幅（m）	最大長（m）	深さ（m）	遺物	備考
SD001	A3・A4	薬研または V 字状	0.95	（5.5）	（0.5）	平安時代の土師器	土石流の流路跡か？

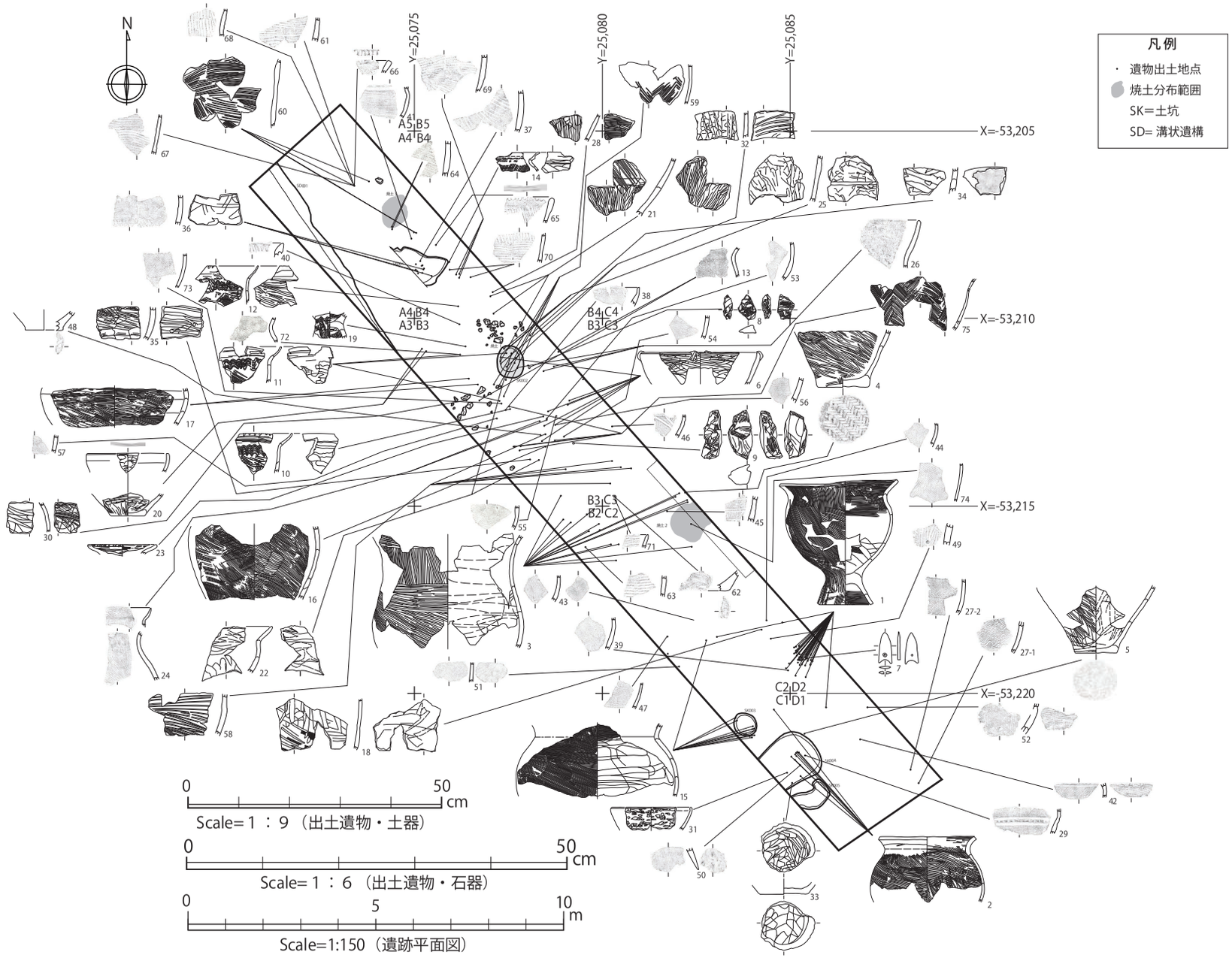
※最大幅・最大長の（　）は検出値

第４節　遺物

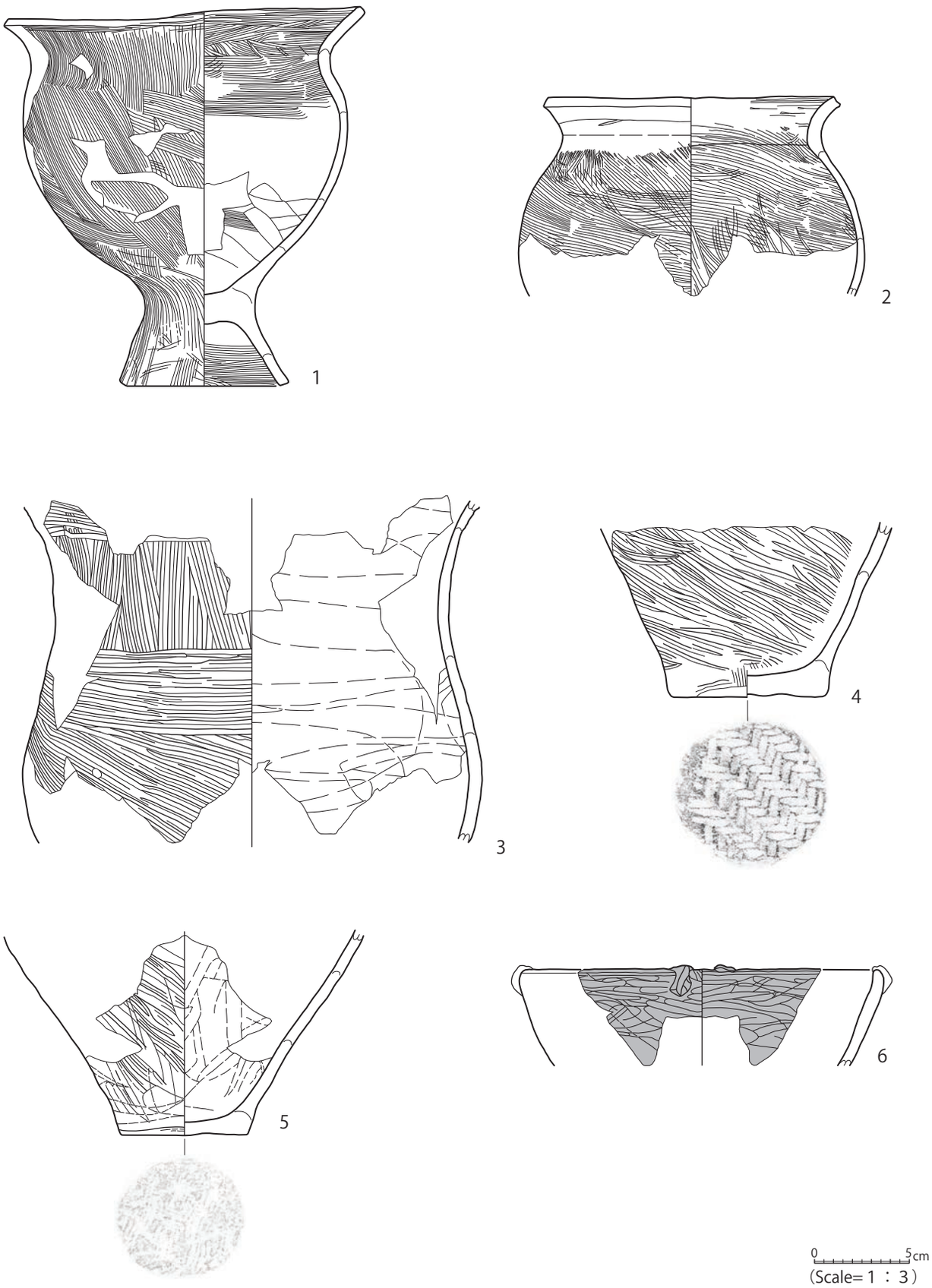
本調査で出土した遺物の大半は弥生時代から古墳時代前期にかけての土器が主体である。それらは遺構に伴うものは少なく、ほとんどが遺物包含層から出土した。調査において遺物番号を付して取り上げた資料は 310 点に及び、このうち３点が石器で、それ以外は土器片である。土器片及び石器で実測し、図示し得たものは 75 点を数える。本節では、図示した出土遺物について概観を述べる。なお、遺物の年代観は、『山梨県史』の弥生時代の土器編年に基づく時期区分に従い、弥生１期（弥生前期）、弥生２期（弥生中期前葉）、弥生３期（弥生中期中葉）、弥生４期（弥生中期後葉）、弥生５期（弥生後期）と区分する。

第 15 図１は、台付甕でＣ２・Ｄ１・Ｄ２グリッドにまたがる範囲に破片がまとまって出土した（第 14 図・第 21 図）。胴部の一部が失われているものの、本調査で完形に復元し得た唯一の資料である。口径 19cm、底径（台部の接地面の径）９cm、器高 19.6cm を測る。外面は縦方向に、内面には横方向に刷毛による調整が施されている。口縁は外反し、胴部の膨らみは緩い。口縁直下の外面は横方向に刷毛目を施した後、縦方向の刷毛で調整を図っている。器形としては山梨県の甲府盆地周辺では見られないタイプのものであり、太平洋沿岸の相模川～天竜川流域に見られるタイプのものである。富士吉田市でも類似した資料が出土している事例がある。器壁は４mm 前後と精細なつくりである。弥生５期、弥生時代後期中葉の時期に位置付けられる。なお、この土器の破片がまとまって出土した範囲の中から第16図７の磨製石鏃が出土している（第21 図）。本資料は故意に打壊された可能性が高く、磨製石鏃が伴っていることから、土器の打壊時に収納されていたか、土器を打壊後に石器が供えられたのか、いずれにせよ儀礼や祭祀を示唆する出土状況である。

第 15 図２は、胴部下半部から底部にかけてを欠くものの台付甕であると推測される。Ｃ１・Ｄ１グリッドにまたがる狭い範囲からまとまって出土した。残存する器高は 10.5cm で、口径は 15cm、胴部の最大径は 18.4cm を測る。口縁の口唇部は面取りをした形跡があり、「く」の字に突出している。外面は左上から右下に向かって斜めに、内面はほぼ横方向に刷毛目が見られる。口縁から頸部にかけては、刷毛目をナデで消した痕跡が認められる。胎土は黄褐色の色調をもち砂の粒子を多く含む。時期は弥生５期（弥生時代後期）から古墳時代前期初頭に位置付けられる。この資料も在地のものではなく、北陸地方、特に新潟県域で見られるタイプである。第 15 図１の台付甕と同様、狭い範囲から土器片がまとまって出土しており、故意に打壊された可能性がある。また、破片の大半は SK004 土坑の範囲から出土しているが、土坑の底面からの出土はなく、SK004 の遺構プランが確認される面よりも上層からの出土のため、遺構に伴う資料ではないと考えられる。



第 14 図　滝沢遺跡　第 5 次調査（Ⅶ区）　出土遺物分布図



第 15 図　出土遺物実測図（1）　縮尺 1 ／ 3

第 15 図３は、Ｂ２・Ｂ３・Ｃ２グリッドの広範囲にわたって散布していた破片を接合した資料である（第 14 図）。一部は試掘調査時に出土した破片も接合した。条痕文が外面に見られる壷の頸部から胴部下部にかけての資料である。残存する最上部に横方向、その下に縦方向、その下に横方向、最下部には左上から右下方向の斜位の条痕が施されている。残存高は 18.4cm、胴部の最大径は 24.2cm を測る。内面は横方向にナデによる調整が認められる。器厚は 0.7cm 前後で焼成は良好である。時期は、弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。特徴から中部高地系（長野県の諏訪地域や松本周辺で見られるタイプ）の土器とも捉えられるが条痕の施文具が貝殻である可能性があり、その場合は東海系の所産である可能性も示唆される。丸子式に併行する段階のものと推測される。

第 15 図４は、Ｃ３グリッドの調査区域の壁から逆位で出土した資料である。胴下半部から底部にかけての資料で、周辺にサブトレンチを設定して精査したが、他の部位は検出されなかった。意図的に該当部位を分離した可能性も考えられる。土器の内部に重鎮していた土を分析したが、埋納物等は認められなかった。土器内面には焦げが濃厚に付着している。胴部外面には左上から右下方向へ斜位の条痕文が見られる。底部には明瞭な網代痕が認められる。残存高は約９cm、底径は 8.4cm で残存する胴部の最大径は 15.4cm を測る。底部からの器壁の立ち上がりは緩やかで、広口壷の一部と推測される。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第 15 図５は、試掘確認調査時に出土した資料で、試掘トレンチの位置からＤ１グリッド、SK004 付近にあたるが、遺構に伴うものではないと考えられる。試掘時に破片がまとまって出土している。胴下半部から底部にかけての破片で、底部からの器壁が広がって立ち上がる。胴部外面には左上から右下方向へ斜位に条痕文が認められる。底径は 6.8cm、残存高は 10.5cm、残存する胴部の最大径は 18.4cm を測る。内面はナデによる調整が見られる。同図４と同時期と考えられるが、弥生３期（弥生時代中期中葉）にかかる可能性もある。

第 15 図６は、高坏の口縁から胴部上半にかけての資料である。Ｂ３グリッド及び SK002 土坑から破片が出土している。内外両面に赤彩が施され、横方向に精緻なミガキが認められる。南関東地域の宮ノ台式に併行するものとみられ、時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。口径は 19cm、残存高は 5.2cm を測る。口縁には４つの突起状の装飾が配されていると推測される。

第 16 図７は石器で、磨製石鏃の完形品である。Ｄ２グリッドからの出土で、Ｃ２・D2 グリッドにまたがり散布していた第 15 図１の台付甕の破片に伴って出土した（第 21 図）。全長 3.3cm、最大幅 1.4cm、厚さ 0.3cm を測る。尾部はＵ字状に削られており、刃部は丹念に研磨され、尾部付近に直径 0.2cm の穿孔がなされている。伴出した台付甕の年代に従うと弥生５期（弥生時代後期）の所産と推測される。台付甕を打壊した際に収納されいたか、打壊された破片の中心に据えられたものか、いずれかの可能性が示唆され、祭祀等の儀礼に伴う資料であると考えられる。磨製石鏃の出土は富士河口湖町内では初の事例である。

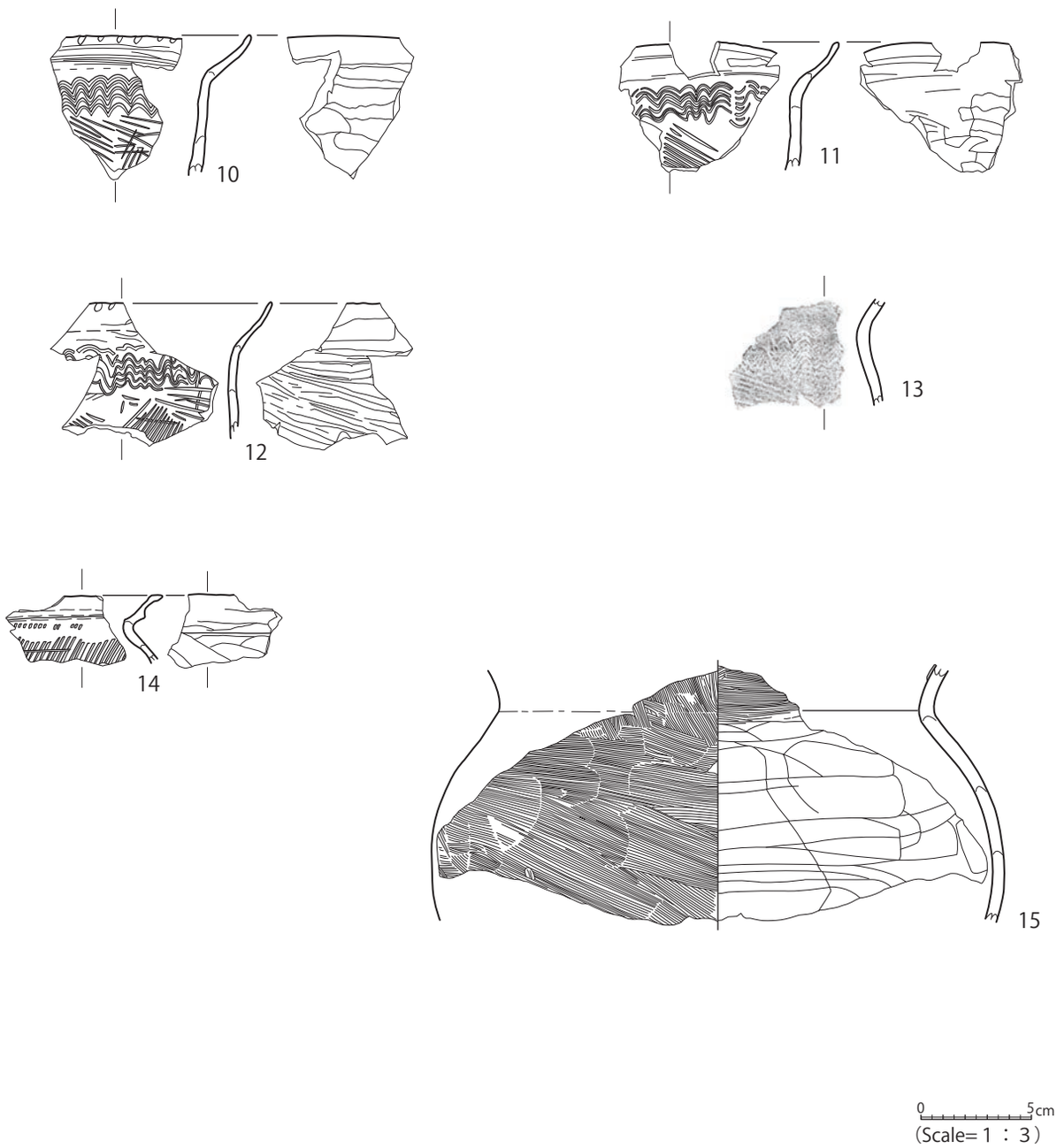
第 16 図８は、黒曜石製の石器で掻器の一種と推測される。Ｂ３グリッドから出土した。全長 2.8cm、最大幅 1.9cm、厚さ 0.9cm を測る。今回の調査における出土資料の年代観から弥生２期～５期（弥生時代中期前葉～後期）の所産と推測される。

第 16 図９は、８と同様に黒曜石の資料である。石核であり、石器の石材として搬入されたと考えられる。全長 5.2cm、最大幅 2.5cm、厚さ 1.9cm を測り、本調査において出土した石器のうち最大の資料である。Ｂ３グリッドからの出土で、土器等に格納されていた可能性は低い。時期は８と同様、本調査の出土遺物の年代観に従い弥生２期～５期（弥生時代中期前葉～後期）の所産と推測される。

第 16 図 10 ～ 13 は壷の口縁から頸部、胴部上部にかけての破片で、胎土や焼成の状況から同一個体であると推測される。10 はＢ３グリッド、11 は SK002 土坑及びＢ３グリッド、12 はＢ４グリッド、13 はＢ３グリッドから出土しており、破片が広範囲に散布している状況が認められる（第 14 図）。波形の櫛描が口縁直下に施されている。胴部上部の外面には斜方向にハケ目に近い条痕があり、内面は緻密にミガキが横方向ないし斜方向になされている。口縁の口唇部の縁辺には刻み（刺突痕）が等間隔に並ぶ。口縁は内湾している。資料はいずれも６cm 程度の残存高である。時期は栗林式に併行するもので、弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。中部高地に多く見られるタイプで、山梨県内では大師東丹保遺跡（南アルプス市）に類似した資料の事例がある。

第 16 図 14 は、Ｓ字口縁台付甕の口縁から頸部にかけての小破片で、残存高は 3.2cm を測る。Ｂ４グリッドの SK001 土坑のプラン縁辺から出土した。口縁の断面形態は非常にシャープである。弥生５期（弥生時代後期）～古墳時代前期初頭に位置付けられると考えられる。伊勢湾岸を中心とする東海地方から波及した資料と推測される。

第 16 図 15 は大型の台付甕の頸部から胴部にかけての資料で、胴部の最大径は 26cm にも及ぶ。外面には細かいハケ目が丹念に施され、内面は横方向にナデによる調整がなされている。頸部の内面には外面と同様に緻密なハケ目が横方向に認められる。丸みを帯びた器形で、破片の大半はＣ１グリッドに集中し、１点のみＣ２グリッドから出土している。Ｃ１グリッ



第 16 図　出土遺物実測図（２）　縮尺１／３（※石器は１／２）

ドでは、SK003 土坑周辺に散布していたが、遺構に伴うものではないと考えられる（第 14 図）。時期は弥生５期（弥生時代後期）に位置付けられる。

第 17 図 16 は壷の胴部の資料で、Ｂ３グリッドから出土した。胴部の最大径は 20.8cm を測り、残存高は 11.9cm、器厚は 0.6cm である。内外面ともに斜方向に緻密なハケ目が確認できる。内面には焦げが顕著に残存している。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

第 17 図 17 は壷の胴下半部の資料で、Ｂ３グリッドからの出土である。残存高は 6.6cm、胴部の最大径は 23.5cm、器厚は 0.7cm を測る。内外面ともに横方向ないし斜方向にハケ目が施されている。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

第 17 図 18 は壷と思われ、胴部の一部の破片である。全体的な器形は判然としない。外面には縦方向にナによる調整と、斜位の条痕が認められる。内面は横方向ないし斜方向にナデが施されている。残存高は 8.0cm で、器厚は 0.6cm を測る。外面の調整の特徴から弥生２期（弥生時代中期前葉）の所産と推測される。

第 17 図 19 は台付甕の胴部と台部（脚部）の接点付近の資料で、Ｂ３グリッドから出土した。残存高は 4.4cm を測る。外面は縦方向、内面には横方向のハケ目が施されている。形態としては第 15 図１の台付甕と類似した資料であると推測される。時期は、弥生５期（弥生時代後期）に位置付けられると考えられる。

第 17 図 20 は、壷の口縁及び底部で、Ｂ３グリッドにおいて口縁の破片と底部の破片が折り重なるように出土したが、頸部から胴下半部かけての破片は得られなかった。底部はわずかに離れた位置から出土した破片と接合している。内外面ともに赤彩が施され、口縁内外面は横方向に、底部外面は縦方向に、底部内面は横方向にそれぞれミガキによる緻密な調整が認められる。また口唇部上面には縄文による施文がなされている。口径は復元値で 12.8cm、底径は 5.4cm を測る。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

第 17 図 21 は壷の胴下半部の一部と推測される資料で、SK002 土坑、Ｂ３グリッド及びＢ４グリッドにまたがる範囲に破片が散布していた。残存高は約９cm、器厚 0.9cm を測る。底部から大きく外反する立ち上がりを有する器形が推定される。外面には縦方向のミガキと斜方向の条痕が、内面には縦方向のミガキが施されている。器形や条痕のあり方から弥生２期（弥生時代中期前葉）に時期が位置付けられる。

第 17 図 22 は、壷の口縁から頸部にかけての資料である。SK002 土坑及びＢ３グリッドから出土した破片が接合し、破片が広範囲に散布していた状況が捉えられる。残存高は約９cm、器厚は 0.8cm を測る。内外面ともに赤彩が施され、口縁の内外面及び頸部の内面は横方向に、頸部の外面には縦方向にミガキが認められる。口縁は緩やかに外反する。時期は弥生４～５期（弥生時代中期後葉～後期）に位置付けられる。

第 17 図 23 は、壷の口縁の破片資料である。Ｂ３グリッドから出土した。口径は復元値で 11.2cm で、残存高はわずか 1.8cm にとどまる。内外面ともに赤彩が施されている。横方向に内外面の両面にミガキが認められる。口縁の口唇部には刻み（刺突痕）が等間隔に並ぶ。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

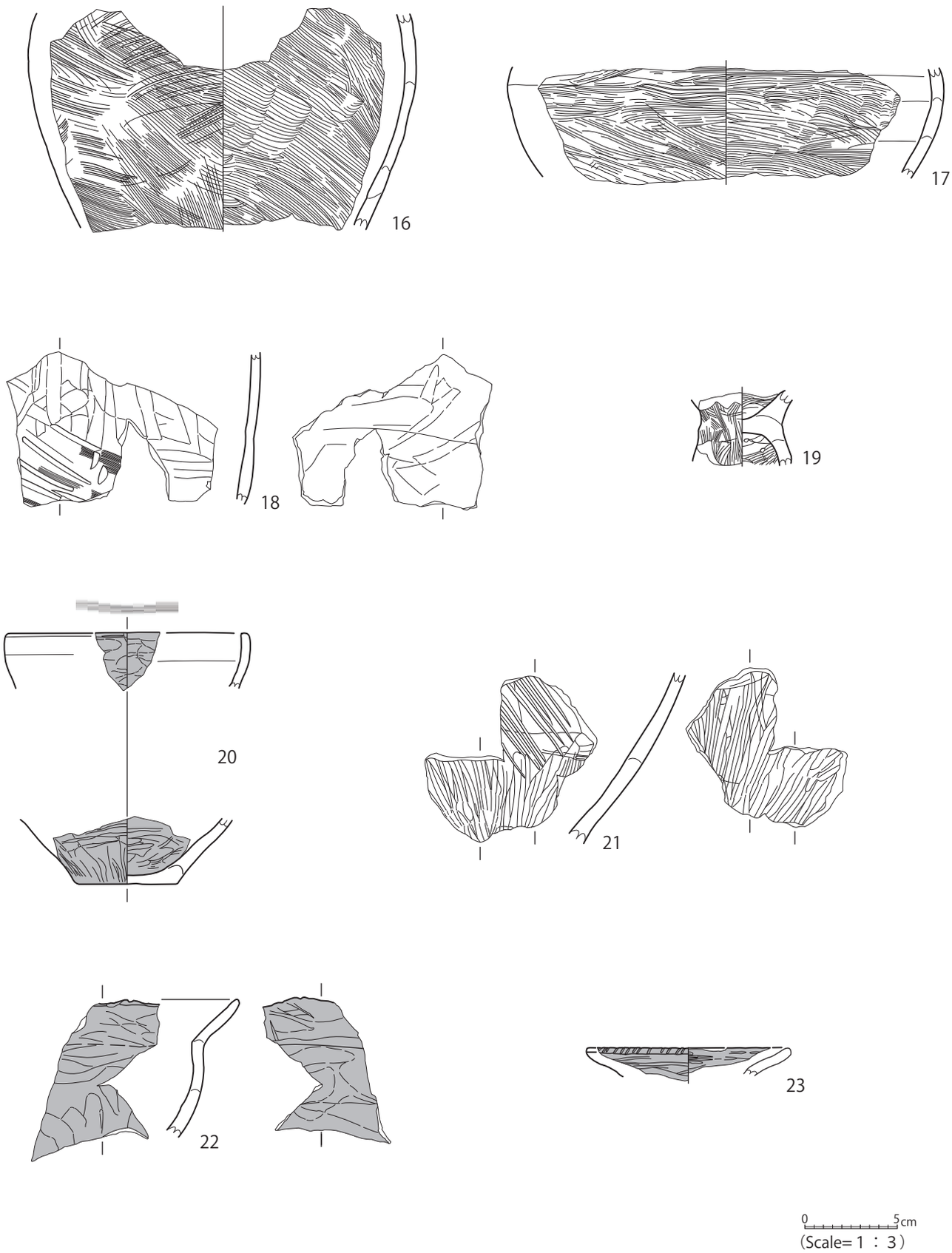
第 18 図 24 は壷の口縁及び胴上半部の破片資料である。胎土等から同一個体と判断されたが、口縁と胴部との接点は得られていない。Ｂ３グリッドから出土した。口縁はわずかに内湾する。口縁の外面には波形の櫛描があり、口唇部上面には縄文による施文が認められる。頸部外面には工具による平行した横方向の条痕が施され、胴部外面には斜方向のハケ目が施され交差している。頸部から胴部にかけては大きく膨らみをもつ。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

第 18 図 25 は壷の胴部の一部と推測される破片資料で、残存高は 7.4cm、器厚は 0.7cm を測る。SK002 土坑の覆土から出土した。外面は縦方向のミガキ及びナデが認められ、内面は横方向のナデがみられ、当該資料には１条の沈線状の調整がある。時期は、弥生２期（弥生時代中期前葉）の所産と考えられるが、部分的な破片のため断定は困難である。

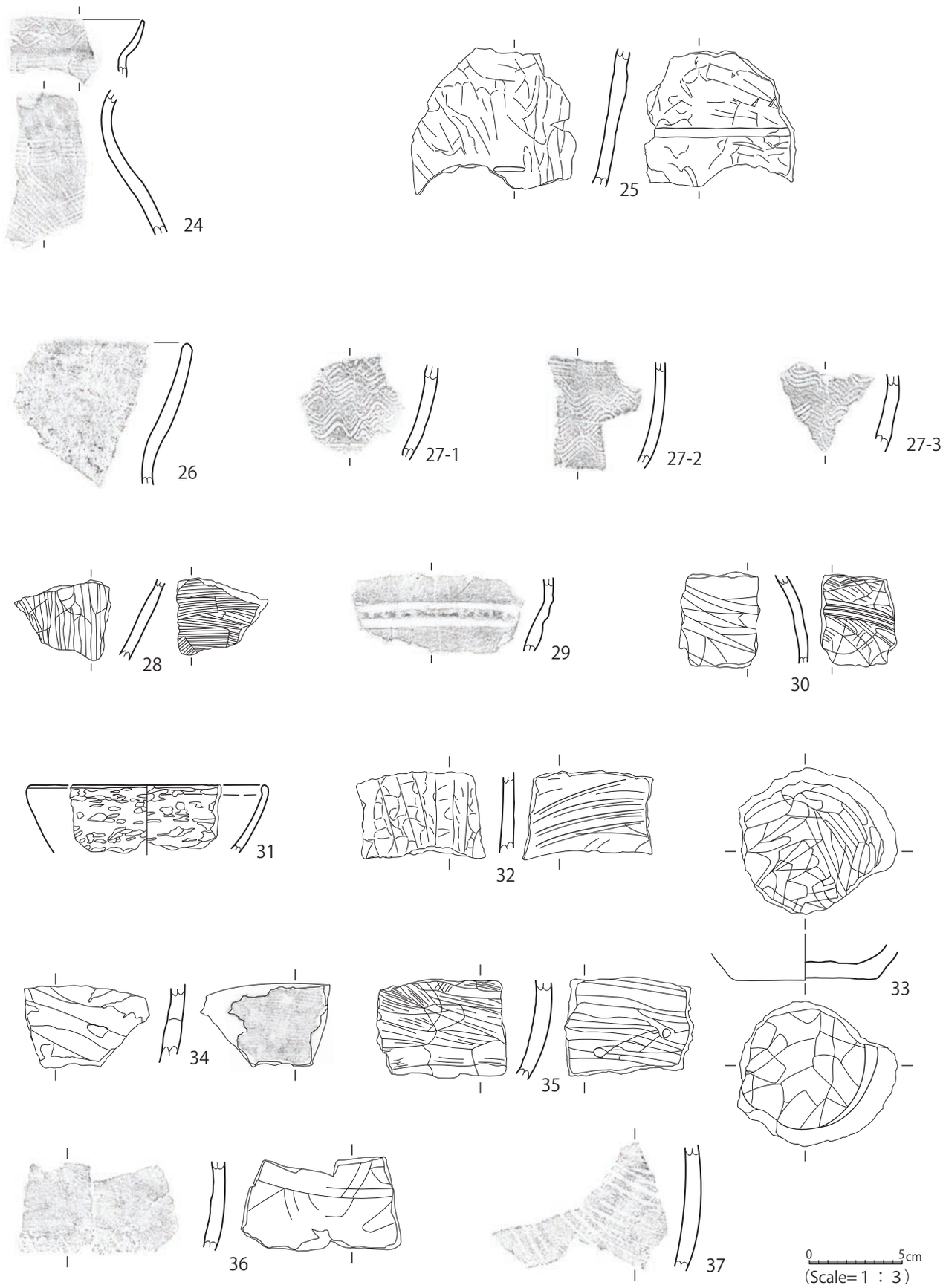
第 18 図 26 は壷の口縁の破片で、SK002 土坑の覆土及びＢ３グリッドに散布していた破片が接合した。残存高は 7.6cm で器厚は 0.7cm を測る。外面にはナデによる調整が認められる。口唇部は半円形で、口縁はわずかに外反する。時期は、弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられると推測される。

第 18 図 27-1 ～３は、同一個体と推測される壷の胴部の破片である。27-1 及び２はＤ１グリッドから、27-3 は試掘調査時のトレンチから出土している。試掘トレンチはＣ１及びＤ１グリッドにかかる位置に設定されていたことから、近接した範囲に破片が散布していたと考えられる。器厚はいずれも 0.6 ｃｍ前後である。外面には波形の櫛描が認められ、中部高地の櫛描文系の一種に分類される。時期は弥生４期～５期（弥生時代中期後葉～後期）のものと考えられる。

第 18 図 28 は壷の胴部の一部と推測される破片資料である。Ｂ４グリッドからの出土で、残存高 4.4cm、器厚は 0.6cm を測る。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のハケ目が認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられると推定される。



第 17 図　出土遺物実測図（3）　縮尺 1 ／ 3



第 18 図　出土遺物実測図（4）　縮尺 1／3

第 18 図 29 は壷の胴部の一部と推測される破片資料である。SK004 土坑の上層及び試掘調査時のトレンチ内から出土した破片が接合した。試掘時に設定されたトレンチはＣ１及びＤ１グリッドにまたがる位置に相当するため、SK004 土坑の位置を含め、近接した範囲に破片が散布していたことになる。残存高は 3.8cm で、器厚は厚い部分で 0.8cm、薄い部分で 0.5cm を測る。外面には二条の平行した沈線が見られ、その沈線に挟まれた稜線上に刻み（刺突痕）が等間隔に並ぶ。時期は弥生３期（弥生時代中期中葉）に位置付けられ、本調査で出土した資料の中では類例が少ない時期のものである。

第 18 図 30 は壷または甕の胴部の一部と思われる破片資料である。Ｂ３グリッドから出土した。残存高は 4.8cm、器厚は 0.6cm を測る。外面は斜方向の条痕がみられ、内面は横方向の条痕及び斜方向のナデが認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられると考えられる。

第 18 図 31 は壷の口縁の破片資料である。Ｃ１及びＤ１グリッドの境界付近、SK004 土坑の覆土上層からの出土である。内外面には丹念に横方向のミガキが施されており、古墳時代中期以降の坏形土器に類似した特徴をもつ。口径は復元値で 12.8cm、残存高は 3.8cm、器厚は 0.4cm である。口唇部は若干内湾する。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられると考えられる。

第 18 図 32 は壷または甕の胴部の一部と推測される破片資料である。SK002 土坑の覆土から出土した。遺構に直接関係する資料ではないと推定される。残存高は 4.6cm、器厚は 0.7.cm を測る。外面には縦方向のミガキ、内面には横方向ないし斜方向の条痕が認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）と推測されるが、部分的な破片資料で全体形の想定が困難なため、時期は幅をもたせて検討する余地がある。

第 18 図 33 は壷の底部である。SK004 土坑の覆土上層から出土したが、遺構に直接関係する資料ではないと推測される。底径は復元値で 7.7cm、残存高は 1.8cm、器厚は 0.8cm である。内外面ともにナデによる調整が認められる。底部には網代痕などは見られない。胎土には長石を多く含む。時期は他の出土遺物の年代観から弥生２～４期（弥生時代中期）の範囲に位置付けられると考えられるが詳細な年代は不明である。

第 18 図 34 は壷または甕の胴部の一部と考えられる破片資料で、Ｂ３グリッドからの出土である。残存高は 4.4cm、器厚は 0.9cm を測る。外面は横方向ないし斜方向のナデ、内面は横方向のハケ目が認められる。時期は他の出土遺物の年代観から弥生２～４期（弥生時代中期）の所産であると推測されるが、詳細な年代は不明である。

第 18 図 35 は壷または甕の胴部の一部と思われる破片資料である。Ｂ３グリッドからの出土で、残存高 5.0cm、器厚は 0.9cm を測る。外面は横方向の条痕、内面には横方向のナデが見られる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）と推測される。

第 18 図 36 は壷の胴部の一部と推定される破片資料である。SK001 土坑の覆土から出土した。残存高は 4.7cm、器厚は 0.8cm を測る。外面に斜方向の条痕が認められ、内面は横方向にナデによる調整が見られる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられると考えられる。

第 18 図 37 は壷の胴部の一部とみられる破片資料である。SK001 土坑の覆土から出土した。SK001 土坑を含む B4 グリッドに散布する土器片に複数の同一個体の資料が存在すると推測される。残存高は 6.7cm、器厚は 0.9cm を測る。外面には斜方向の条痕が認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

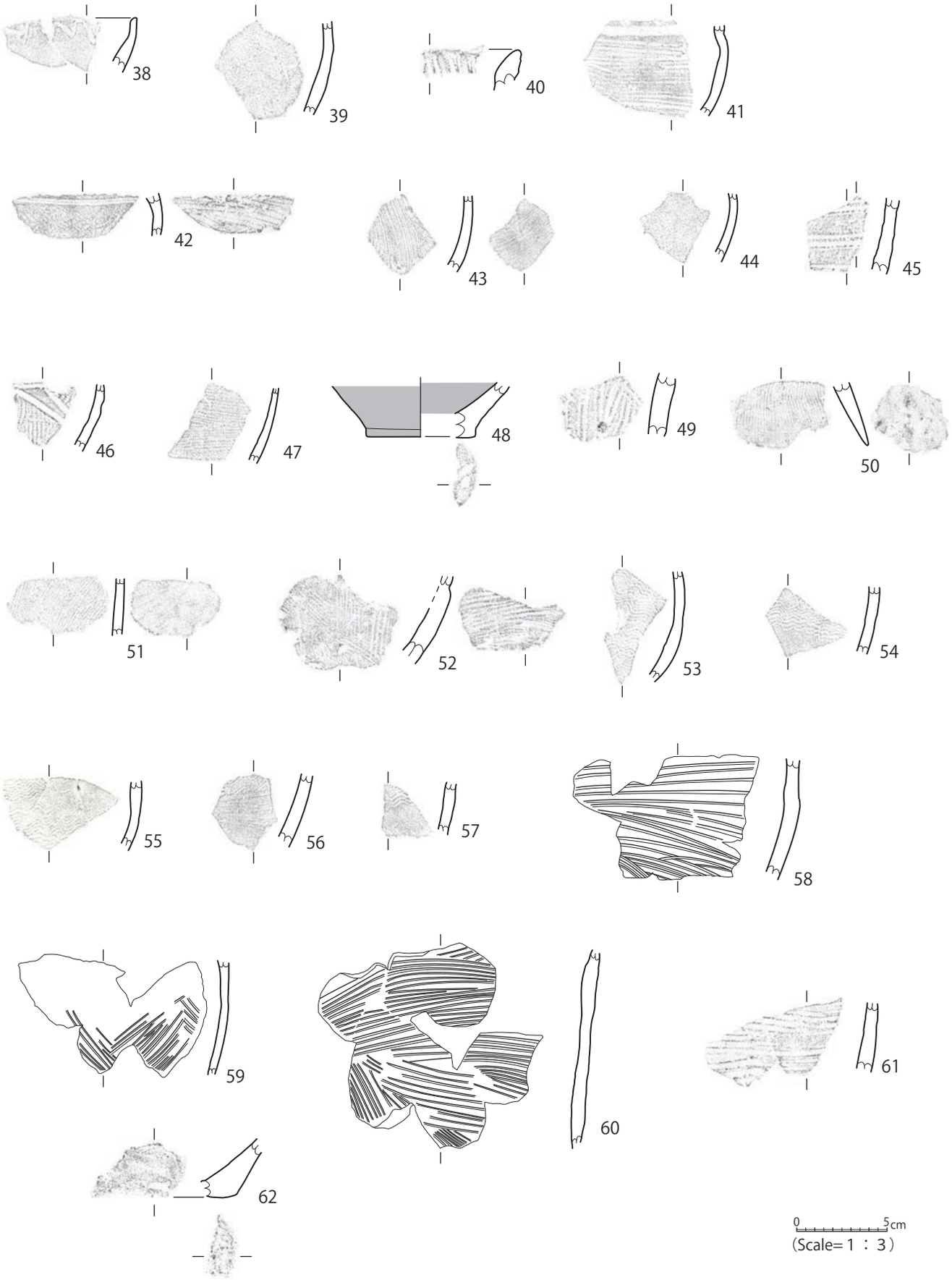
第 19 図 38 は壷の口縁の破片資料である。Ｂ３グリッドからの出土である。微細な破片のため口径の復元は不可能であるが、残存高は 2.9cm、器厚は口唇部で 0.4cm、頸部寄りの部分で 0.7cm を測る。口唇部直下には波形の条痕が１条認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられ、中部高地系のものと推定される。

第 19 図 39 は台付甕の胴部の一部と推測される破片資料である。Ｃ２グリッドからの出土で、第 15 図１の台付甕の破片群に近接して検出されたが、接点が見られず、胎土等から判断して別個体であると推測される。残存高は 5.2cm、器厚は 0.6cm を測る。外面には斜方向のハケ目が認められる。時期は第 15 図１と同様、弥生５期（弥生時代後期）に位置付けられると推測される。

第 19 図 40 は壷の口縁の破片資料である。同一個体と思われる細かい破片が複数出土しているが、図示し得るものが皆無であるため、口縁である当該資料のみ掲載した。Ｂ３グリッドからの出土で、残存高は 1.7cm にとどまる。口唇部の厚みは 1.2cm を測る。外面は縦方向に条痕が認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第 19 図 41 は壷の胴部の破片資料である。Ｂ４グリッドの遺物が集中して出土した範囲から検出された。残存高は 4.9cm で、器厚は 0.6cm を測る。外面の残存部の上端付近に沈線が見られ、全体的に横方向の条痕またはハケ目が認められる。内面はナデにより調整されている。時期は弥生３期（弥生時代中期中葉）に位置付けられる。

第 19 図 42 は壷の胴部の破片資料で、Ｄ１グリッドからの出土である。残存高は 2.5cm、器厚は 0.6 ～ 0.8cm 程度である。外面の残存部上端付近に沈線が見られ、全体に縄文による施文がみられる。内面には横方向のハケ目が認められる。時期は弥生３期（弥生時代中期中葉）に位置付けられると推定される。



第 19 図　出土遺物実測図（5）　縮尺 1 ／ 3

第 19 図 43・44 は、台付甕の胴部と推定される破片資料である。いずれもＣ２グリッドからの出土である。44 は焼土２に伴って出土している。内外面ともに斜方向のハケ目が認められる。残存高はいずれも 4.0cm 前後で、器厚は 0.5 ～ 0.6cm を測る。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）と捉えられる。

第 19 図 45 は、壷の胴部と推測される破片資料である。Ｃ２グリッド、焼土２に近接した地点から出土した。残存高は 4.2cm、器厚は 0.8cm を測る。外面には横方向に平行した条痕が認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第 19 図 46 は壷の胴部と捉えられる破片資料で、Ｃ３グリッドからの出土である。残存高は 3.7cm、器厚は 0.5cm を測る。外面には擦消縄文が見られ、弧状の沈線が認められる。時期は弥生３期（弥生時代中期中葉）に位置付けられる。

第 19 図 47 は壷または甕の胴部とみられる破片資料である。Ｃ２グリッドから出土した。外面には横方向のハケ目が認められる。特徴から台付甕の胴部とも捉えられる。残存高は 4.3cm、器厚は 0.5cm を測る。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）以降のものと推定される。

第 19 図 48 は壷の底部の破片資料である。Ｂ３グリッドの遺物が集中して出土した範囲から検出された。内外面ともに赤彩が施され、ミガキによる調整が認められる。底部には網代痕の一部がみられる。微細な破片であるため、復元値に誤差は生じると考えられるが、底径は 6.1cm 前後と推測される。残存高は 3.3cm で、底部からの立ち上がりの器厚は 0.7cm を測る。全形が把握できないが、時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられると思われる。

第 19 図 49 は深鉢の胴部の一部と推測される破片資料である。Ｃ２グリッドから出土した。残存高 3.2cm、器厚は 1.1cm を測る。外面には縦方向に平行した沈線が認められ、ボタン状の突起が貼り付けられている。これらの特徴から縄文時代前期の諸磯式期の所産と推定され、本調査において最古に位置付けられる出土資料である。

第 19 図 50 は台付甕の底部の破片資料である。SK004 の覆土上層から出土しているが、他の出土資料と同様に遺構とは直接的な関係を有さないものと考えられる。残存高は 3.5cm で、外面には縦方向のハケ目が認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）とみられ、近接して出土している第 15 図１・２などの台付甕と同時期のものと推定される。

第 19 図 51 は台付甕の胴部と推定される破片資料である。Ｃ２グリッドから出土した。残存高は 3.1cm、器厚は 0.5cm を測る。外面は概ね縦方向、内面には横方向のハケ目が認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）以降のものと考えられる。

第 19 図 52 は壷の胴部の一部と推測される破片資料で、底部から立ち上がる部位のものと考えられる。Ｄ１グリッドからの出土で、残存高 5.2cm、器厚 1.1cm を測る。外面は縦方向及び斜方向、内面は横方向のハケ目がそれぞれ認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）以降のものと考えられる。

第 19 図 53・54・55・56・57 の５点は、同一個体と推測される壷の胴部の破片資料である。いずれもＢ３グリッドからの出土であるが、接点が見出されず接合には至っていない。器厚は 0.6cm 前後である。いずれの資料も外面に波形の櫛描が平行して認められる。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

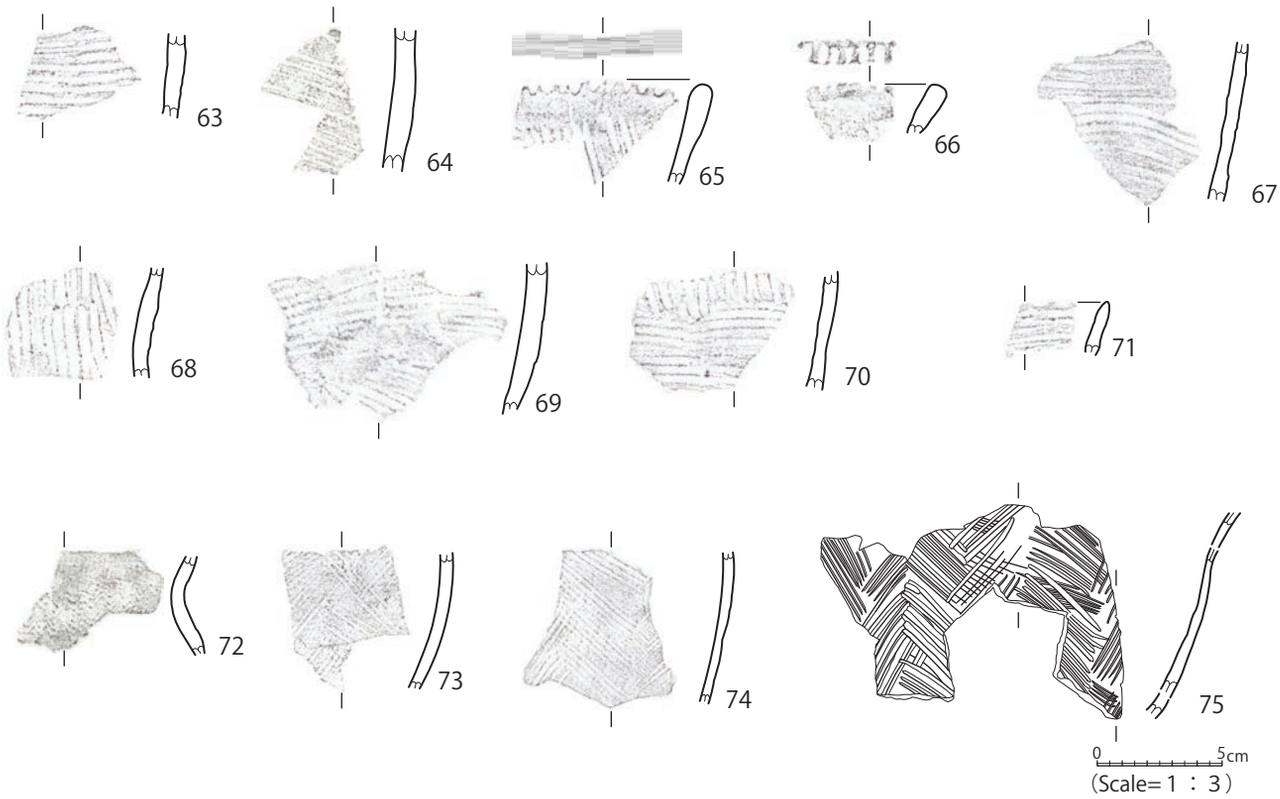
第 19 図 58 は、壷の胴部の破片資料で、Ｂ３及び C[3 グリッドに散布していた破片が接合した。残存高は 6.8cm、器厚は 0.8cm を測る。外面には横ないし斜方向の条痕が認められる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）と位置付けられ、胎土や出土位置から第 15 図３の壷と同一個体であると推測される。

第 19 図 59 は、壷の胴部の破片資料である。Ｂ３グリッドに散布していた４点の破片が接合した。残存高は 6.4cm、器厚は 0.5cm を測り、焼成は極めて良好である。内外面の全体にわたり精細なミガキが認められる。外面には逆ハの字条の条痕が平行して認められる。時期は、弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

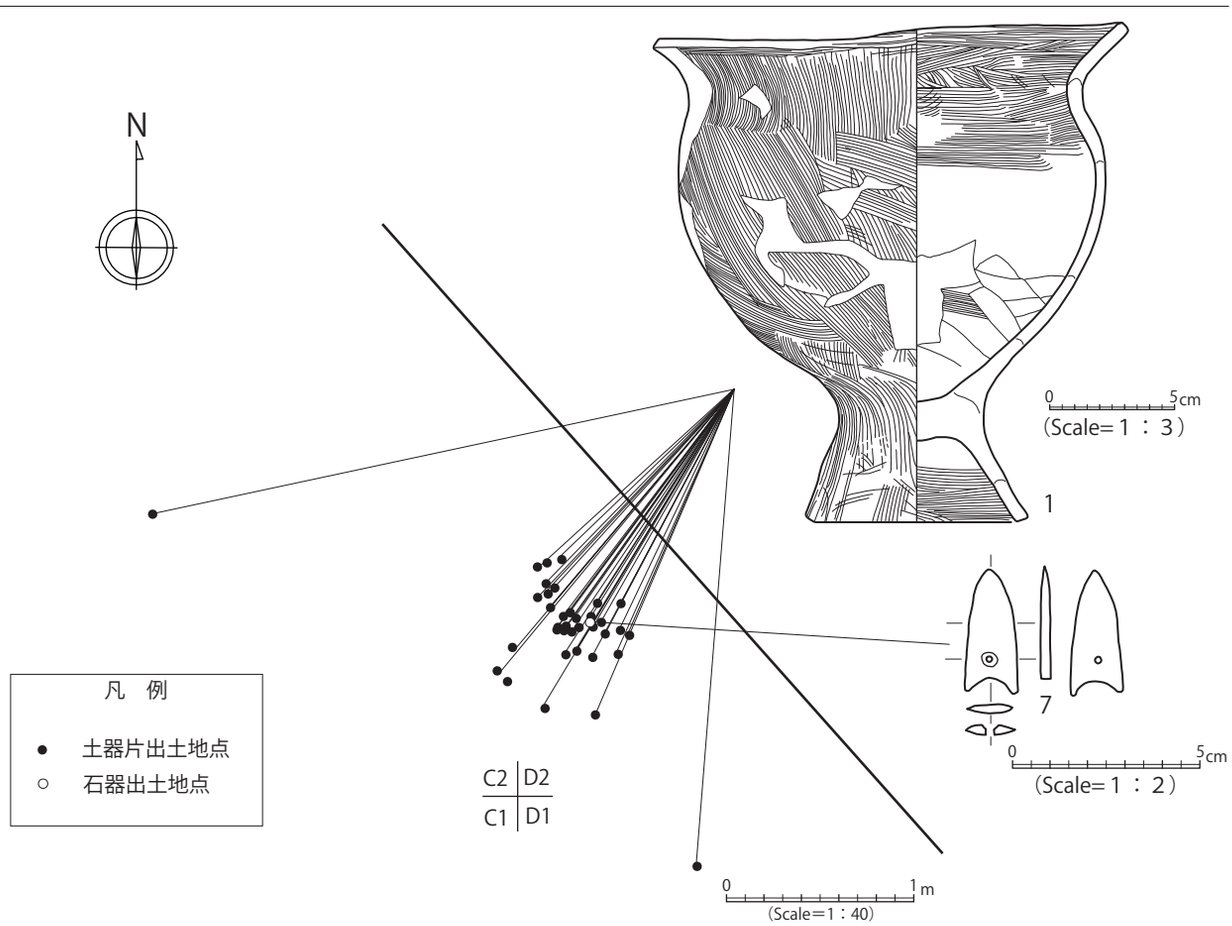
第 19 図 60・61、第 20 図 64・65・66・67・68・69・70 の９点は同一個体と推定される壷の破片資料群である。60 はＡ４及びＢ４グリッドにまたがって散布していた３点の破片が接合した。60・61・66・67・68 はＡ４グリッドの同じ地点からまとまって出土している。64 はＡ４グリッドの焼土３に伴い出土した。65・69・70 はＢ３グリッドに散布しており、Ａ４及びＢ４グリッドに９点の資料に関係する破片がまとまって分布している（第 14 図）。60・61・64・67・69 は胴下半部の破片と推定され、横方向ないし斜方向の条痕が外面に施されている。65・66 は口縁の破片で、口唇部には刻みが連続して付加されており、口唇部より下部は縦方向に条痕が認められる。68 は胴の屈曲部の破片で縦方向の条痕が、70 は 68 の下に連続する部位と見られ、縦方向の条痕の下に横方向の条痕が見られる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられ、第 15 図３に類似した形態の土器であることがうかがえる。

第 19 図 62 は壷の底部の破片資料で、Ｃ３グリッドから出土した。内外面ともにナデによる調整が認められる。残存高は 2.6cm 程度で、底部から緩やかに立ち上がる形状が推測される。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）と捉えられる。

第 20 図 63 は壷の胴部の破片である。Ｂ２グリッドからの出土で、第 15 図３と同一個体であると推測される。



第 20 図　出土遺物実測図（6）　縮尺 1 ／ 3



第 21 図　遺物出土状況詳細図（平面図　縮尺 1 ／ 40・実測図（土器）　縮尺 1 ／ 3・実測図（石器）縮尺 1 ／ 2）

第20図71は壷の口縁の破片資料である。Ｃ３グリッドから出土した。残存高は2.2cmにとどまり、器厚は0.5cmである。口唇部には幅0.5cm程の刻みが連続して認められる。外面には横方向の条痕がみられる。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第20図72は壷の頸部の破片資料である。Ｂ３グリッドからの出土である。第16図の10～13と同一個体の可能性がある。残存高は3.9cmで器厚は0.6cmを測る。外面に波形の櫛描が平行して付されている。焼成は極めて良好である。時期は弥生４期（弥生時代中期後葉）に位置付けられる。

第20図73・75は壷の胴部の破片資料で同一個体の資料と推測される。いずれもＢ３グリッドからの出土で、75は５点の破片が接合した。焼成は極めて良好で、内面に緻密なミガキが認められる。外面にはハの字状の条痕が平行して濃密に付されており、部分的に条痕が交差する。残存高は8.4cm、期厚は0.4cmを測る。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第20図74は壷の胴部の破片資料で、Ｃ２グリッドの焼土２の範囲から出土した。焼土との関連性は明確ではない。残存高は6.3cm、器厚は0.4cmを測る。外面にはハの字状の条痕が連続して付されている。時期は弥生２期（弥生時代中期前葉）に位置付けられる。

第15から20図にわたり、図示し得た75点の資料について概観を触れたが、第19図49の縄文時代前期に位置付けられる深鉢形土器の胴部の破片を除き、第16図７・８・９の３点の石器を含め弥生２期から５期に位置付けられる資料が大半を占め、第15図２及び第16図15の台付甕２点が古墳時代前期初頭に位置付けられる可能性があり、出土資料の時期の下限と考えられる。本調査における出土資料は、弥生時代中期前葉から古墳時代前期初頭にかけての遺物包含層に伴うものと考えられ、遺構のプランの範囲から出土した遺物は、それぞれの遺構に伴うものではなく、遺構の構築後または廃絶後に混入した可能性が高いと考えられる。検出された５基の土坑は弥生時代中期以前の所産であると位置付けるのが無難であると思われる。ただし、検出された３基の焼土遺構（焼土１～３）については、遺物の検出レベルとの差異が少なく、遺物の所属時期である弥生時代中期前葉～古墳時代前期初頭に並存していた可能性がある。遺物の出土状況は、第15図１が完形に、同図２が口縁から胴部にかけて復元し得た以外は破片資料であり、住居跡などの生活痕に伴うものではないと考えられる。焼土遺構は、住居跡の炉の一部と捉えるよりは屋外における加熱行為が推定されるが、土器の焼成遺構等である可能性は低いと推測される。約90㎡という狭小な調査面積にも関わらず弥生時代中期前葉から古墳時代前期初頭にかけての遺物がまとまって出土した点から、本調査の調査区であるⅦ区の周辺には当該期の集落遺跡が埋蔵されている可能性が高いと思われる。平成21年度に山梨県埋蔵文化財センターが国道137号河口２期バイパスの建設工事に際して実施した当遺跡の第２次調査のⅣ区において、方形周溝墓が検出されていることからも弥生時代の集落が営まれ、一定の権力を有する集団が存在したことが想定される。

遺物の出土状況から見ると、第15図１の台付甕は１個体分の破片が狭い範囲にまとまって分布し、完形に復元し得る状況にあったことから、故意に打壊された可能性が示唆される（第21図）。また、第16図７の磨製石鏃が伴出している点から、台付甕に石器を埋納していた可能性も想定され、祭祀や儀礼が行われた痕跡と捉えることができる。第15図２の台付甕は石器は伴わないものの同様に意図的に打壊された可能性が浮かび上がる。Ｃ１・２、Ｄ１・２グリッド周辺は、祭祀を行う儀礼空間として位置付けられていた可能性も考えられる。その他の土器の多くは破片資料が大半を占めることから、廃棄されたとみられる。

また、出土遺物の地域をまとめると、第15図１の台付甕は太平洋岸の相模川から天竜川の流域にかけて、同図２は北陸地方から新潟県域に、同図３は中部高地ないし東海地方に、同図６は南関東地域に、第16図10～13・第20図72などは長野県の諏訪・松本地域に、第16図14は伊勢湾岸を中心とする東海地方にそれぞれ分布域を有する資料である。当遺跡の出土資料は山梨県の甲府盆地の同時期の遺跡と共通性を見出せる資料も散見するが、他地域から波及したとみられる資料が前述のとおり多数含まれる。当遺跡は内陸の富士山麓という立地にあり、甲府盆地と太平洋岸を結ぶルート上に位置する。甲府盆地からさらに山間地を経て、長野県域や北陸地方とも結びつきがあったと考えられ、広域にわたる交流が弥生時代中期から古墳時代前期にかけて盛んであった可能性が示唆される。富士山の火山活動による溶岩流の流入を直接受けることがない安定した立地であったこと、河口湖の湖水に面して水資源に恵まれていたこと、御坂峠という長い歴史の中で甲斐国の交流や物流を支えてきた主要な交通路に伴う峠のたもとに位置することなど、複数の条件が重なり本調査における出土資料のバラエティに反映されたと考えられる。海のない内陸の山間地である当遺跡を含む山梨県域では、人間の生活のために塩や海産物の確保は不可欠であり、海岸地域との交流は必然的に求められたと考えられる。しかしながら、最寄の太平洋沿岸に限らず日本海沿岸に分布する土器も出土したことから、単純に塩や海産物を移入するための交流にとどまらず、様々な情報や物資を移動する慣習があったことが想定される。

第４表　土器・石器観察表（１）

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法（cm）			成形及び調整方法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
15	1	1	C2・D1・D2	土器	台付甕	19.0	19.6	9.0	ハケ	ハケ	ハケ	茶褐色	密	良好	75%程度	弥生５期	東海系
15	1	2	SK004・C1・D1	土器	台付甕	15.0	(10.5)	—	ハケ	ハケ	—	淡茶褐色	密	良好	50%程度	弥生５期	北陸系
15	1	3	B2・B3・C2・C3	土器	壷	—	(18.4)	—	条痕	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
15	1	4	C3	土器	壷	—	(9.0)	8.4	条痕	ナデ	網代	黄褐色	密	良好	底部のみ	弥生２期	丸子式併行
15	1	5	D1（試掘１T）	土器	壷	—	(10.5)	6.8	条痕	ナデ	網代	茶褐色	密	良好	底部のみ	弥生２期	丸子式併行
15	1	6	SK002・B3	土器	高坏	(19.0)	(5.2)	—	ミガキ	ミガキ	—	赤彩色	密	良好	口縁破片	弥生４期	南関東系
16	2	7	D2	石器	磨製石鏃	最大幅 1.4	全長 3.3	厚さ 0.3	—	—	—	—	—	—	100%	弥生	穿孔あり
16	2	8	B3	石器	掻器	最大幅 1.9	全長 2.8	厚さ 0.9	—	—	—	—	—	—	100%	弥生	黒曜石
16	2	9	B3	石器	石核	最大幅 2.5	全長 5.2	厚さ 1.9	—	—	—	—	—	—	100%	弥生	黒曜石
16	2	10	B3	土器	壷	—	(6.2)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	栗林式併行
16	2	11	SK002・B3	土器	壷	—	(6.6)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	栗林式併行
16	2	12	B4	土器	壷	—	(5.6)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	栗林式併行
16	2	13	B3	土器	壷	—	(4.5)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	頸部破片	弥生４期	栗林式併行
16	2	14	B4	土器	S字口縁台付甕	—	(3.2)	—	ハケ	ナデ	—	黄褐色	密	良好	口縁破片	弥生５期	東海系
16	2	15	SK003・C1	土器	壷	—	(12.2)	—	ハケ	ナデ＋ハケ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生５期	
17	3	16	B3	土器	壷	—	(11.9)	—	ハケ	ハケ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	
17	3	17	B3	土器	壷	—	(6.6)	—	ハケ	ハケ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生3～4期	
17	3	18	C2	土器	壷	—	(8.0)	—	ナデ＋条痕	ナデ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
17	3	19	B3	土器	台付甕	—	(4.4)	—	ハケ	ハケ	ハケ	淡褐色	密	良好	脚部破片	弥生５期	東海系？
17	3	20	B3	土器	壷	(12.8)	(6.8)	5.4	ミガキ	ミガキ	ナデ	赤彩色	密	良好	口縁・底部	弥生４期	赤彩
17	3	21	SK002・B3・B4	土器	壷	—	(9.0)	—	条痕	ミガキ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
17	3	22	SK002・B3	土器	壷	—	(9.0)	—	ミガキ	ミガキ	—	暗赤彩色	密	良好	口縁破片	弥生4～5期	赤彩
17	3	23	B3	土器	壷	(11.2)	(1.8)	—	ミガキ	ミガキ	—	赤彩色	密	良好	口縁破片	弥生４期	赤彩
18	4	24	B3	土器	壷	—	(11.8)	—	櫛描	ナデ	—	暗黄褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	
18	4	25	SK002	土器	壷	—	(7.4)	—	ナデ	ナデ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	口唇に縄文
18	4	26	SK002・B3	土器	壷	—	(7.6)	—	ナデ	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生２期	
18	4	27	D1	土器	壷	—	(5.8)	—	櫛描	ナデ	—	暗灰褐色	密	良好	胴部破片	弥生4～5期	
18	4	28	B4	土器	壷	—	(4.4)	—	ナデ	ハケ	—	暗褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
18	4	29	SK004	土器	壷	—	(3.8)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生３期	
18	4	30	B3	土器	壷	—	(4.8)	—	条痕	条痕	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
18	4	31	SK004	土器	壷	(12.8)	(3.8)	—	ミガキ	ミガキ	—	淡茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	
18	4	32	SK002	土器	壷	—	(4.6)	—	ミガキ	条痕	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
18	4	33	SK004	土器	壷	—	(1.8)	(7.7)	ナデ	ナデ	ナデ	茶褐色	密	良好	底部破片	弥生2～4期	
18	4	34	SK002	土器	壷	—	(4.4)	—	ナデ	ハケ	—	暗褐色	密	良好	胴部破片	弥生2～4期	
18	4	35	B3	土器	壷	—	(5.0)	—	ナデ	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
18	4	36	SK001	土器	壷	—	(4.7)	—	ナデ	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
18	4	37	SK001	土器	壷	—	(6.7)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	

第５表　土器・石器観察表（２）

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法（cm）			成形及び調整方法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
19	5	38	B3	土器	壷	—	(2.9)	—	櫛描	ナデ	—	暗黄褐色	密	良好	口縁破片	弥生４期	中部系
19	5	39	D2	土器	台付甕	—	(5.2)	—	ハケ	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生５期	東海系？
19	5	40	B3	土器	壷	—	(1.7)	—	条痕	ナデ	—	明茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生２期	
19	5	41	B4	土器	壷	—	(4.1)	—	ハケ	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生３期	
19	5	42	D1	土器	壷	—	(2.5)	—	擦消縄文	ハケ	—	淡茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生３期	
19	5	43	C2	土器	台付甕	—	(4.3)	—	ハケ	ハケ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生５期	東海系？
19	5	44	C2	土器	台付甕	—	(3.9)	—	ハケ	ナデ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生５期	東海系？
19	5	45	C2	土器	壷	—	(4.2)	—	条痕	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	
19	5	46	C3	土器	壷	—	(3.7)	—	擦消縄文	ナデ	—	明茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生３期	
19	5	47	C2	土器	壷 or 甕	—	(4.3)	—	ハケ	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	
19	5	48	B3	土器	壷	—	(3.3)	(6.1)	ミガキ	ミガキ	網代	赤彩色	密	良好	底部破片	弥生４期	赤彩
19	5	49	C2	土器	深鉢	—	(3.2)	—	条痕	ナデ	—	茶褐色	密	良好	胴部破片	縄文前期	貼付突起
19	5	50	SK004	土器	台付甕	—	(3.5)	—	ハケ	ハケ	ハケ	暗黄褐色	密	良好	底部破片	弥生５期	東海系？
19	5	51	C2	土器	台付甕	—	(3.1)	—	ハケ	ハケ	—	暗黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生５期	東海系？
19	5	52	D1	土器	壷	—	(5.2)	—	ハケ	ハケ	—	暗褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	
19	5	53	B3	土器	壷	—	(6.2)	—	櫛描	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
19	5	54	B3	土器	壷	—	(3.8)	—	櫛描	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
19	5	55	B3	土器	壷	—	(3.8)	—	櫛描	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
19	5	56	B3	土器	壷	—	(3.9)	—	櫛描	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
19	5	57	B3	土器	壷	—	(2.8)	—	櫛描	ナデ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生４期	中部系
19	5	58	B3・C3	土器	壷	—	(6.8)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
19	5	59	B3	土器	壷	—	(6.4)	—	条痕	ナデ	—	暗灰褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
19	5	60	A4・B4	土器	壷	—	(10.6)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
19	5	61	A4	土器	壷	—	(3.8)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
19	5	62	C3	土器	壷	—	(2.4)	—	ナデ	ナデ	網代？	暗茶褐色	密	良好	底部破片	弥生２期	中部系
20	6	63	B2	土器	壷	—	(3.4)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	64	焼土３	土器	壷	—	(5.6)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	65	B4	土器	壷	—	(4.0)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生２期	中部系
20	6	66	A4	土器	壷	—	(1.9)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生２期	中部系
20	6	67	A4	土器	壷	—	(6.3)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	68	A4	土器	壷	—	(4.4)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	頸部破片	弥生２期	中部系
20	6	69	B4	土器	壷	—	(5.8)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	70	B4	土器	壷	—	(4.9)	—	条痕	ナデ	—	暗茶褐色	密	良好	頸部破片	弥生２期	中部系
20	6	71	C3	土器	壷	—	(2.2)	—	条痕	ナデ	—	茶褐色	密	良好	口縁破片	弥生２期	
20	6	72	B3	土器	壷	—	(3.9)	—	櫛描	ナデ	—	暗灰褐色	密	良好	頸部破片	弥生４期	中部系
20	6	73	B3	土器	壷	—	(5.4)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	74	焼土２	土器	壷	—	(6.1)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	黄褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系
20	6	75	B3	土器	壷	—	(8.5)	—	櫛描	ナデ＋ミガキ	—	暗灰褐色	密	良好	胴部破片	弥生２期	中部系

第Ⅳ章　総括

今回の本発掘調査の結果、土坑５基、焼土遺構３基、溝状遺構１条を検出し、310 点の出土遺物（図示し、掲載した遺物は 75 点）を得た。本章では、これまで実施した近接地の発掘調査結果と合わせて調査成果を総括したい。なお、当遺跡と関連性の高い鯉ノ水遺跡についても考察の対象とする。

第１節　弥生時代中・後期、古墳時代前期の出土遺物からみた滝沢遺跡と周辺

本調査において出土した遺物の多くは弥生２期（弥生時代中期前葉）～弥生５期（弥生時代後期）にかけての時期に属するものであり、一部は古墳時代前期初頭にかかるものも含まれる。当遺跡では、これまでの４次にわたる発掘調査においても当該期の出土遺物が報告されている。特に平成 21 年度に実施された第２次調査では、弥生時代の方形周溝墓が検出されており、弥生時代に一定の集落の営みがあり、在地の有力者が存在した可能性が示唆される。本調査では住居跡等の遺構は検出されなかったが、弥生時代中期から古墳時代前期初頭の遺物が濃密に出土したことから、当遺跡には弥生時代の生活域が埋蔵されている可能性が高いと推測される。古墳時代前期以降の時期についても、これまでの調査によって遺物が連綿と見出されており、平成 25 年度に実施された鯉ノ水遺跡の発掘調査では、古墳時代中期の遺物がまとまって出土しており、生活域が河口湖の湖水に面した地域にまで拡散していく状況を読み取ることができる。河口湖から近く日当たりのよい立地にあり、弥生～古墳時代を通して生産性が高く、良好な居住域であったと考えられる。古代には、律令制の施行に伴い東海道甲斐路が鯉ノ水遺跡を通過する経路で設けられるが、滝沢遺跡は沿道に存在が想定される河口駅の駅戸の集落と推測され、東海道甲斐路の線形に規定された計画的な配列をもつ竪穴建物が設けられ、集落が構築される（第５図）。

第２節　出土遺物の地域からみた移入路の想定

本調査で出土した遺物は、御坂山地を隔てて近接する甲府盆地で見られる中部高地に由来する弥生時代の土器のほか、東海地方や南関東地方、北陸地方の土器も混在している。弥生時代は稲作の農耕社会が波及する時期であり、その伝播に関連して他地域の遺物が移入するとも考えられるが、海岸に面していない内陸の山間地である山梨県の立地条件により、海岸地域との交流が不可欠であったことが背景にあると想定される。

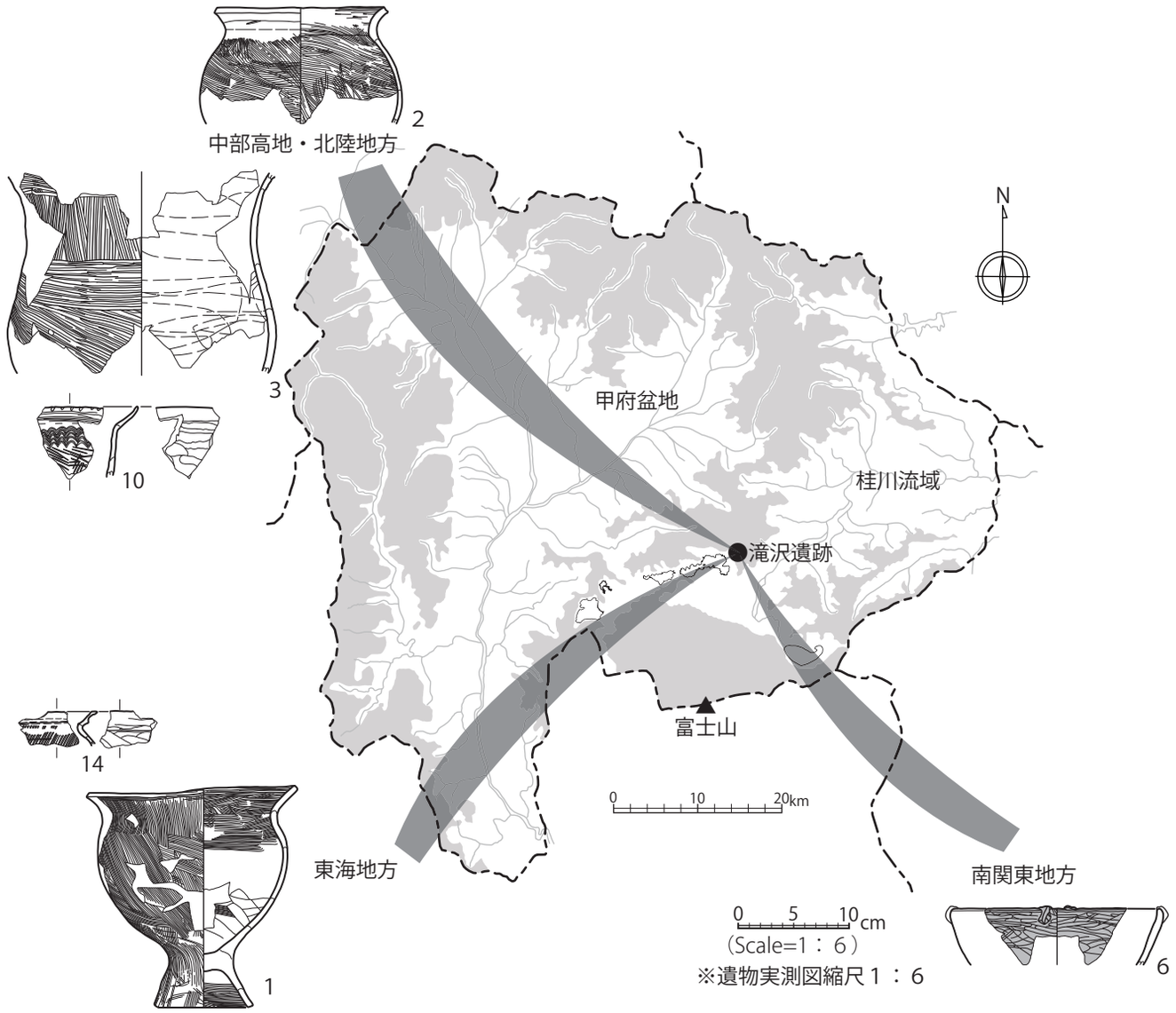
中部高地の系統の土器は、伊那・諏訪方面から甲府盆地を経由して移入したと考えられ、当遺跡の位置から御坂峠を越えてもたらされた可能性がある。

東海地方の系統の土器は、①富士川を北上して甲府盆地を経由する経路、②静岡県富士市から北上して富士宮市を経由して富士山の西をめぐる後世の「中道往還」に類似した経路をたどり、精進湖付近から東進する経路、③駿河湾から富士山の東麓を北上し、三国山から籠坂峠にかけての稜線を越え、山中湖村・忍野村・富士吉田市を東西に横断して移入する経路といった３つの移入経路が想定される。

南関東地方の系統の土器は、①太平洋岸を西進し、足柄峠を越え静岡県駿東郡小山町または同県御殿場市付近から山地（三国山から籠坂峠にかけての山稜）を越えて移入する経路、②関東平野から関東山地を越えて桂川流域に至り、上野原市・大月市を西進し、都留市・西桂町・富士吉田市を南北に縦断して移入する経路の２つの経路が想定される。

第 15 図２の弥生５期（弥生時代後期）から古墳時代前期初頭に位置付けられる台付甕は北陸地方、特に新潟県域に由来をもつ系統のものであり、その移入経路は複数想定される。①北陸地方から南下して長野県の諏訪地域を経由し甲府盆地に至る経路、②同じく北陸地方から南下し、長野県の佐久地方を経由し後世の「佐久往還」に類似したルートで甲府盆地に至る経路、③北陸地方から越後山地を越えて関東平野に至り、関東山地（雁坂峠、柳沢峠か）を越えて甲府盆地に達する経路、④北陸地方から③と同様に関東平野に至り関東山地を越えて桂川流域に至る後世の「甲州街道」と「富士道」に類似した移入経路、⑤北陸地方から琵琶湖付近を経由して太平洋岸に至り、後世の「東海道」のように太平洋沿岸を東進して駿河湾に達し、静岡県富士市付近から後世の「中道往還」と類似した富士山の西麓を経由して移入するルートなど様々な経路を想定することができる。当遺跡では第３次調査の際に土器集中から古墳時代前期初頭の近江地方に由来のある「受け口状口縁壷」が出土しており、⑤の移入経路を想定する根拠になると考えられる。第２次調査では畿内に系譜をもつ「叩き甕」も出土しており、西日本との結びつきが指摘されている。

甲府盆地の曽根丘陵の上の平遺跡（甲府市）をはじめ、甲斐市の金の尾遺跡などにみられる方形周溝墓などの墳墓を築造する文化は、大陸から畿内を経由してもたらされたと考えられる。稲作とともにその伝播経路考えるうえで、山梨県内には後世の「御坂路（東海道甲斐路）」、「中道往還」などの交通路の前身となる交易ルートが存在したことが想定される（第 22 図）。



第 22 図　滝沢遺跡（第５次調査）出土遺物　移入ルート想定図

第３節　調査の成果と課題

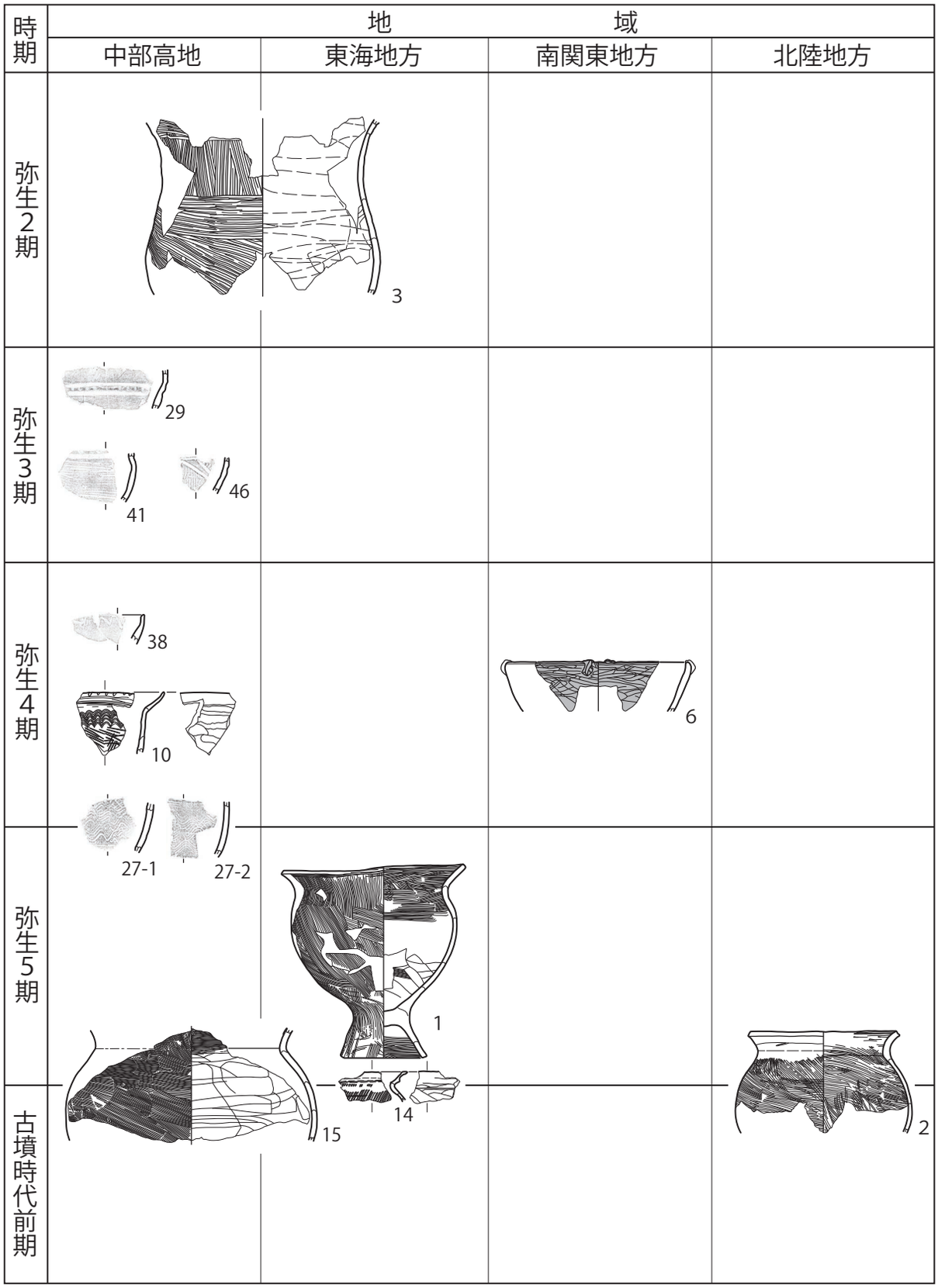
今回の調査は約 90㎡という小規模な本発掘調査であったが、弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての良好な出土資料が得られ、当遺跡周辺において当該期に人々の生活が盛んであったことをうかがい知ることができた。また、出土遺物の由来する地域も多方面に及ぶことが確認され、広域的な交流が行われていたことが浮かび上がった。古代の東海道甲斐路に伴う集落遺跡であることで著名となりつつある当遺跡であるが、その下地となる前身の交易路の存在が想起される。

山梨県内において弥生時代の遺跡は『山梨県史』編纂段階では調査事例が少なかったが、その後調査事例が増加しており、本調査の出土資料は今後の体系的な分類や整理の一助となる資料群であると考えられる。山梨県内の当該期の遺跡の出土資料と合わせ、詳細な検討が必要である。第６表に本調査で出土した遺物の時期と地域をまとめた。

当遺跡では２次調査において方形周溝墓が検出された以外に弥生～古墳時代にかけての遺構の検出例が少なく、特に住居跡をはじめ、人々の居住域、集落跡の発見には至っていない。また、出土遺物の量からも当遺跡周辺には弥生～古墳時代の集落の存在は疑う余地がなく、集落に伴い墓域や墳墓がさらに埋蔵されている可能性も高いと考えられる。出土遺物も破片資料が大半であり、完形の資料を得るためには住居跡に伴う良好な状態の遺物の出土が待たれる。

河口湖北東岸に位置し、富士山の火山活動による溶岩流の流下の被害を受けることのない安定した立地にあり、御坂峠という甲斐国の重要な交通の要衝に近接した地域であるという条件が重なり、弥生時代から古代にかけて連綿と人々が活動し、土地利用が図れられてきた。しかしながら、鯉ノ水遺跡の発掘調査の成果と合わせ、当遺跡周辺は複数回にわたり土石流の被害を受けており、先人たちは生活を維持するために復興を繰り返してきたことも明らかとなった。

当遺跡周辺では、国道及び主要地方道の建設工事が完了し、商業地あるいは宅地として開発が進むことが想定される。今後も開発行為に際して遺跡の範囲、内容を綿密に確認し保護を図ることが不可欠である。



0 5 10 cm
（Scale=1：6）

第６表　滝沢遺跡（第５次調査）出土遺物　時期・地域等系統図

写　真　図　版

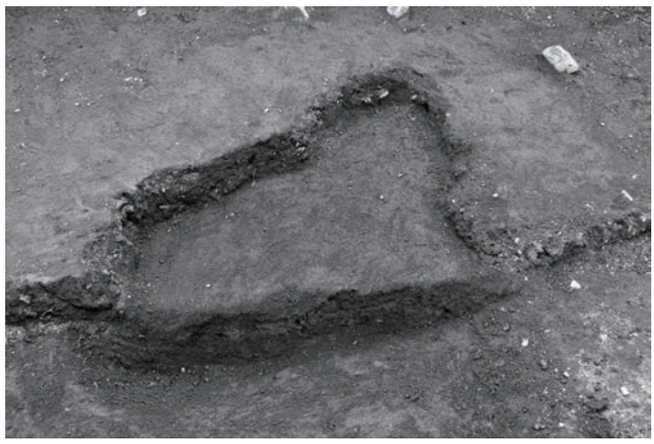
1．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）垂直写真

2．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）全景　南東から

3．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）調査風景

写真図版２

１．SK001 覆土断面

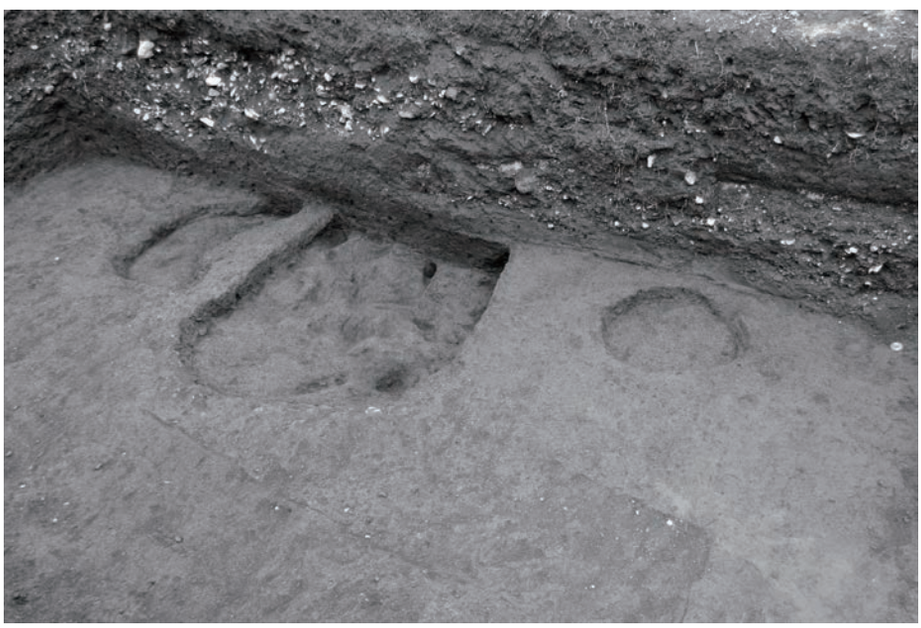


２．SK001 完掘状況

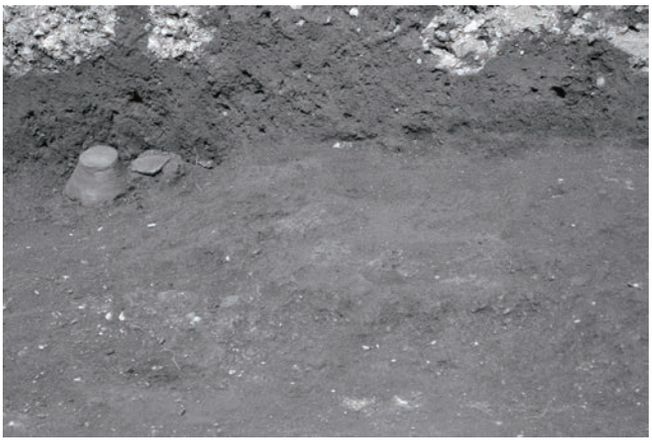
３．SK002（焼土１）遺物出土状況

４．SK002 完掘状況

５．SK003（上）・004（下）検出状況



６．SK005（左）・SK004（中）・SK003（右）完掘状況



１．焼土２検出状況

２．焼土２断面

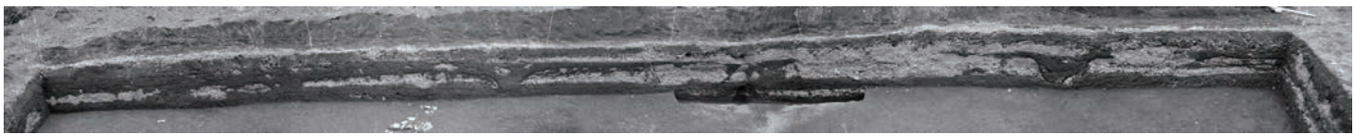
３．焼土３検出状況

４．焼土３断面

５．SD001 完掘状況１

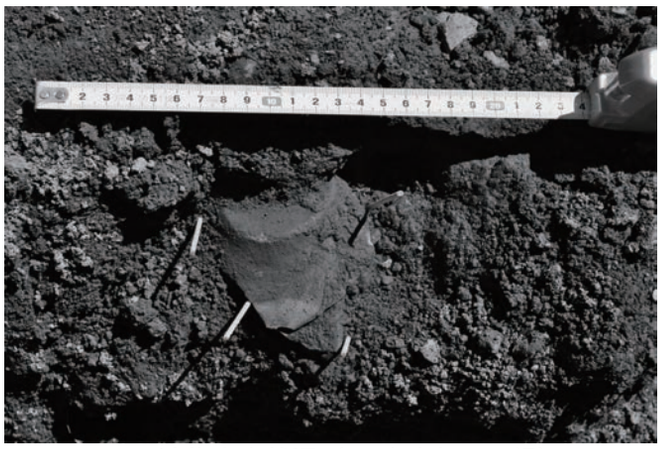
６．SD001 完掘状況２

写真図版４



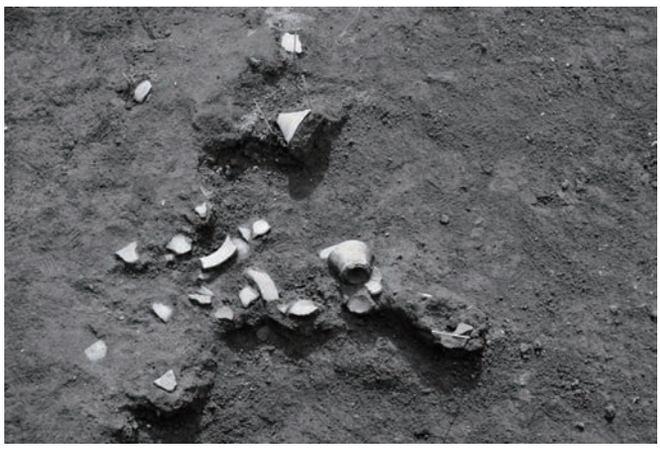
１．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）東壁セクション

２．滝沢遺跡（第５次・Ⅶ区）北壁セクション



３．遺物出土状況（20 壷底部・口縁）

４．遺物出土状況（17 壷胴部）



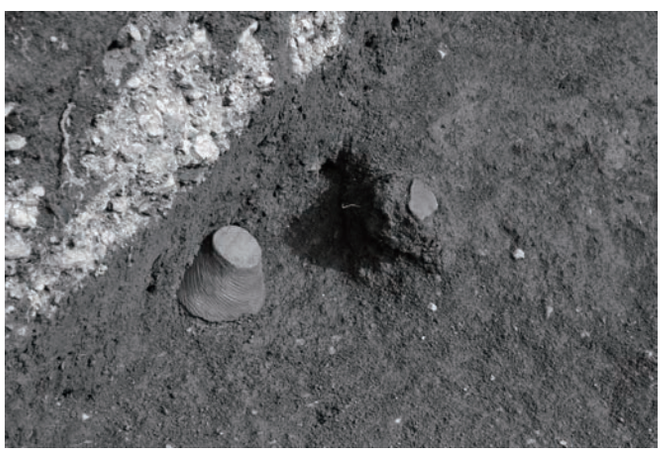
５．遺物出土状況（１台付甕）

６．遺物出土状況（７磨製石鏃）

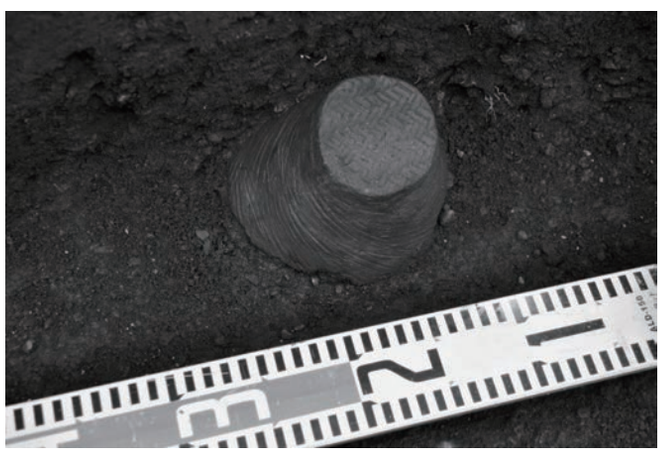
７．遺物出土状況（２台付甕口縁）

1．遺物出土状況（15 台付甕）

2．遺物出土状況（２台付甕口縁）

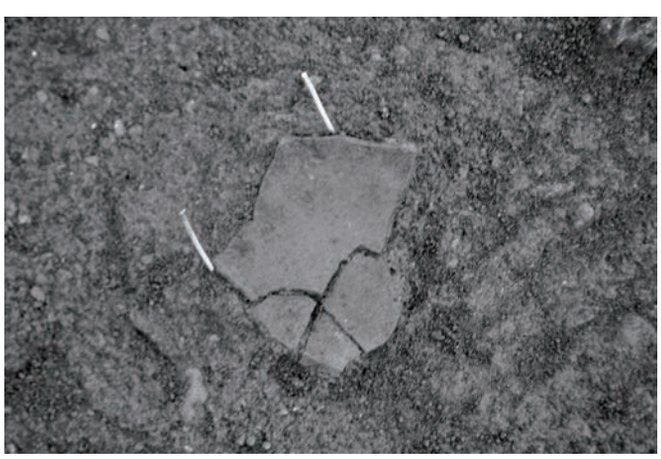


3．遺物出土状況（４壷底部）



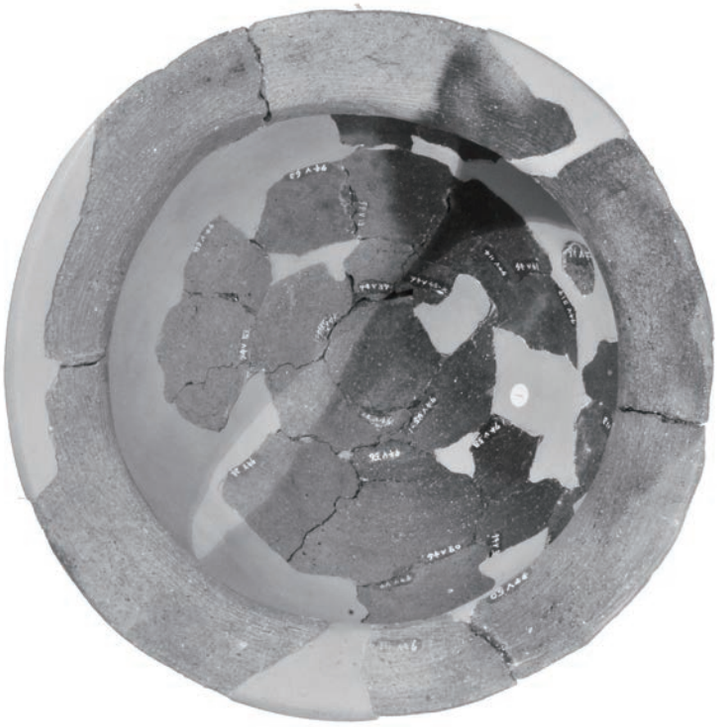
4．遺物出土状況（４壷底部）

5．遺物出土状況



6．遺物出土状況（16 壷胴部）

写真図版６

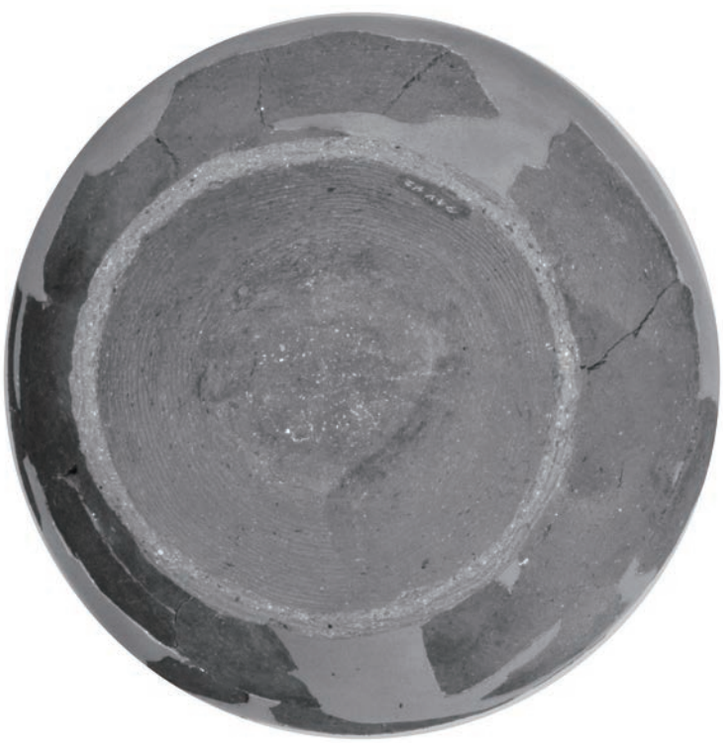


1　見込み

1　外面

出土遺物写真（1）

1　外面



1　底部

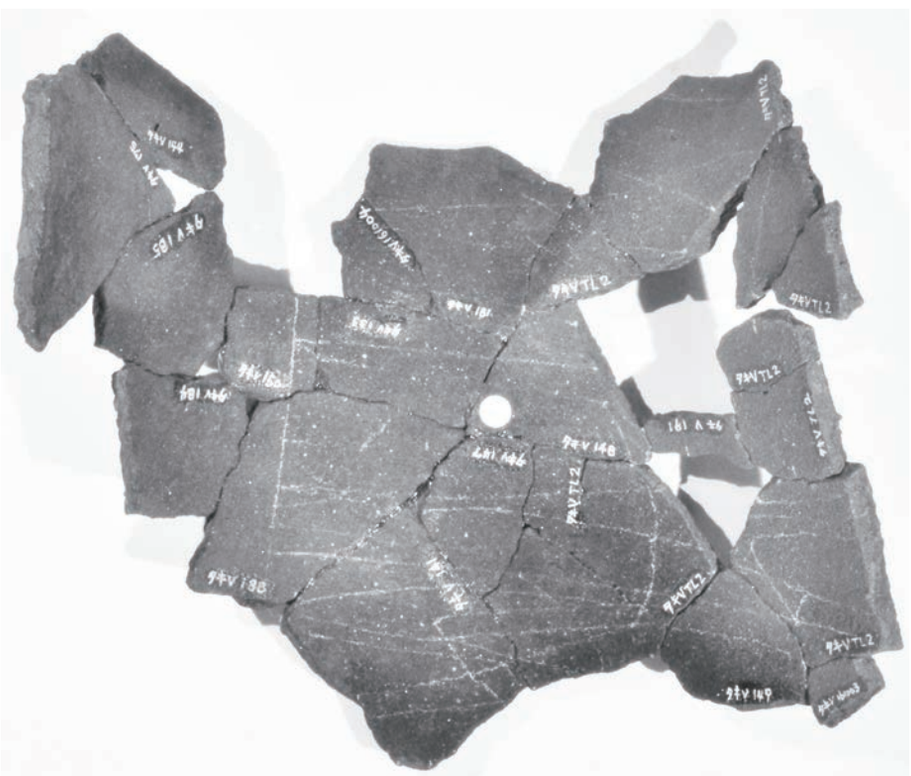
出土遺物写真（２）

写真図版８

２　見込み

２　外面

3　外面

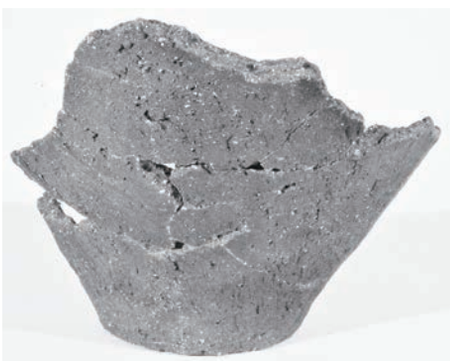


3　内面

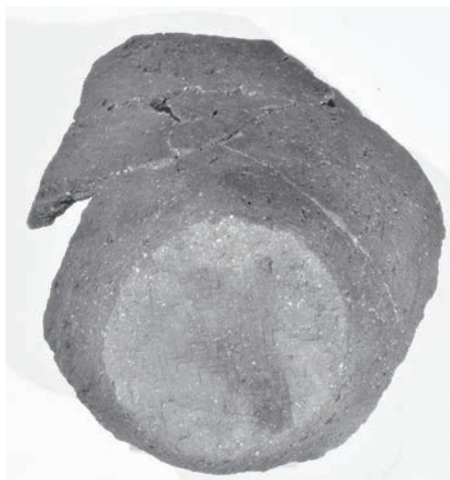
出土遺物写真（４）

4　外面

4　底部



5 外面

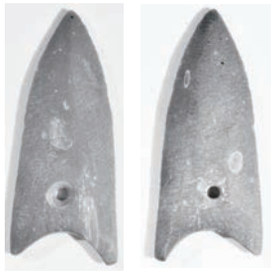


5　底部

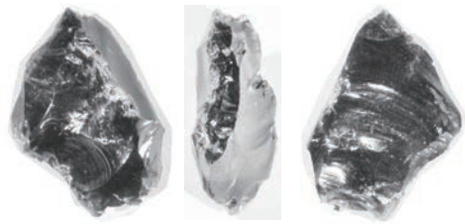
6　外面

6　内面

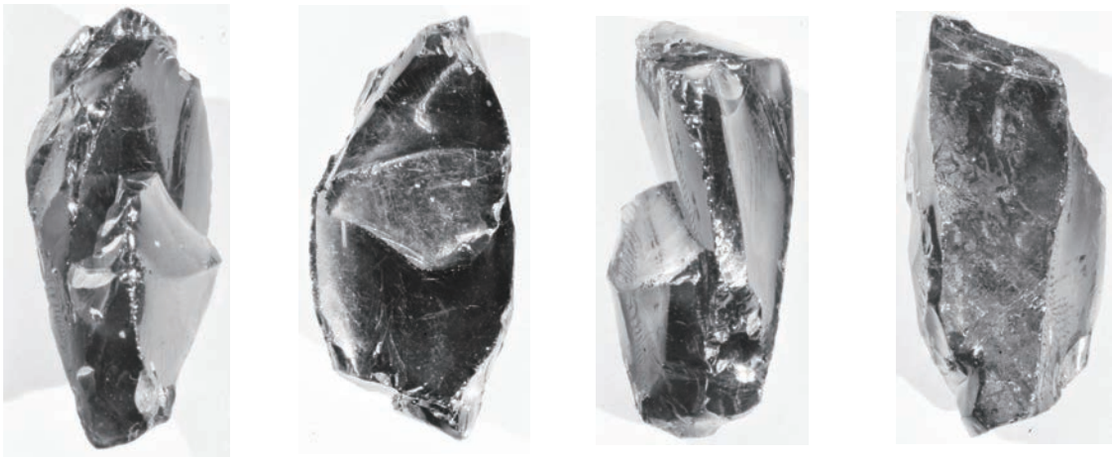
出土遺物写真（5）



7　表面　　裏面

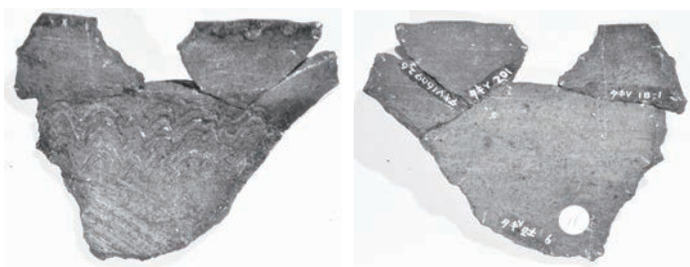


8　表面　　側面　　裏面



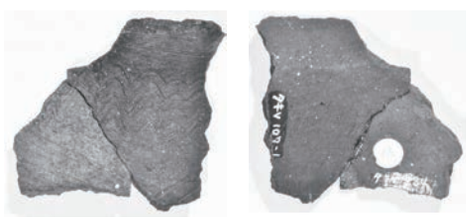
9　黒曜石

10　外面　　内面

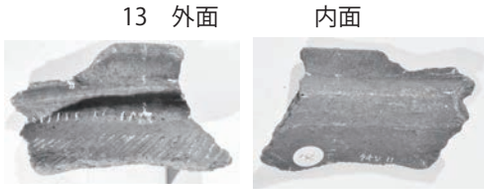


11　外面　　内面

12　外面　　内面



13　外面　　内面

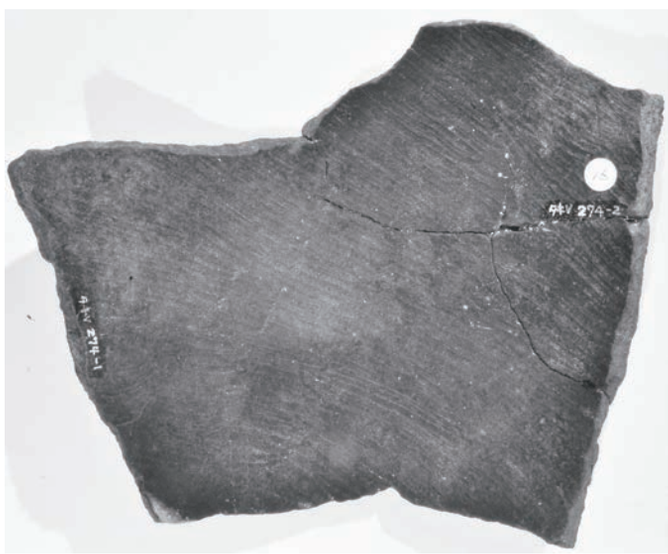


14　外面　　内面

出土遺物写真（6）

15　外面

16　外面



内面

出土遺物写真（7）

17　外面

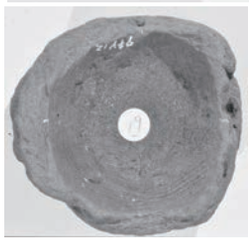
17　内面

18　外面

内面

19　内面

外面



底部

20 外面

内面

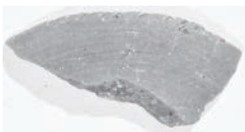
20　底部

出土遺物写真（8）

写真図版 14

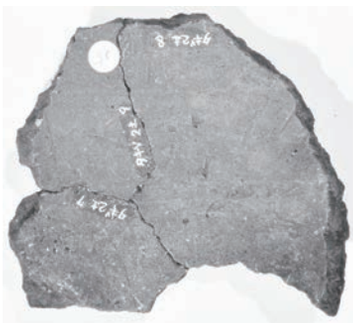
21　外面　　内面

22　外面　　内面

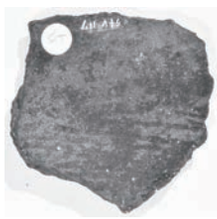


23　外面　　内面

24　外面　　内面



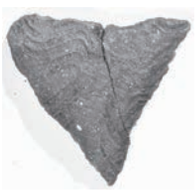
25　外面　　内面



27-1　外面　　内面

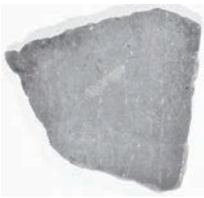
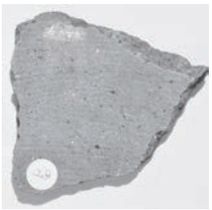
26　外面　　内面

27-2　外面　　内面



27-3　外面　　内面

出土遺物写真（9）

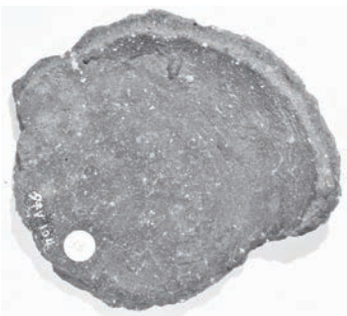



28　外面　　内面

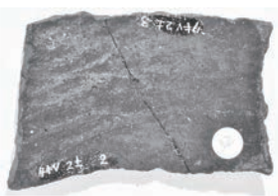
29　外面　　内面

30　外面　　内面

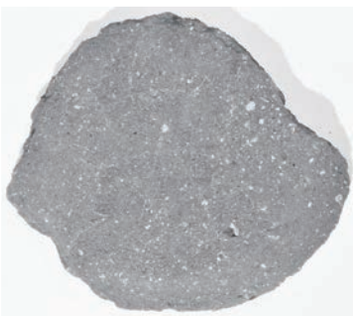
31　外面　　内面



33　内面（見込み）



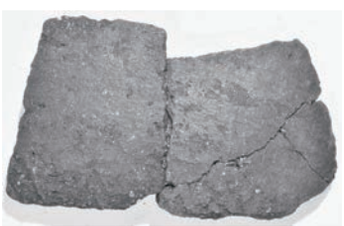
32　外面　　内面



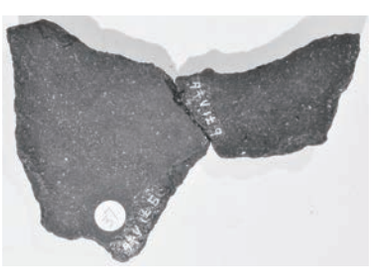
33　外面（底部）

34　外面　　内面

35　外面　　内面



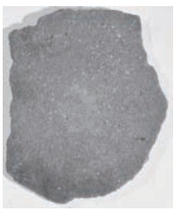
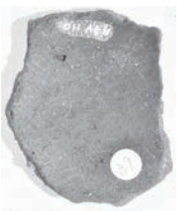
36　外面　　内面



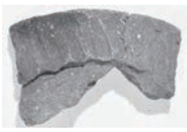
37　外面　　内面

38　外面　　内面

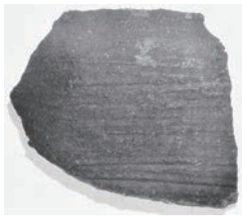
写真図版 16

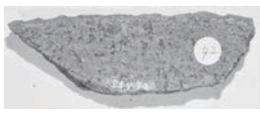
39　外面　　内面



40　外面　　内面



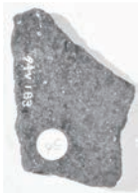
41　外面　　内面



42　外面　　内面

43　外面　　内面

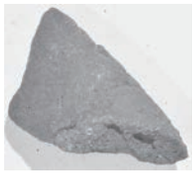
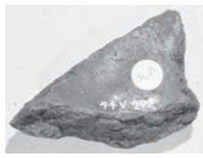
44　外面　　内面



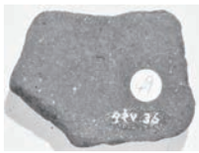
45　外面　　内面

46　外面　　内面

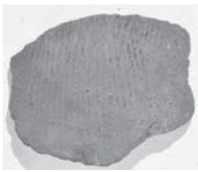
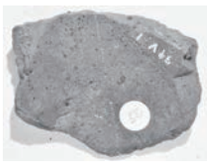
47　外面　　内面

48　外面　　内面

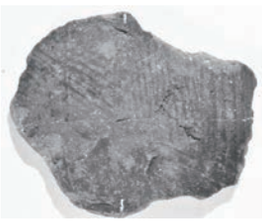
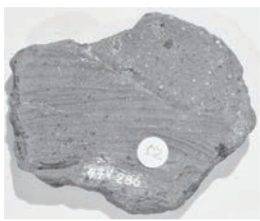


49　外面　　内面

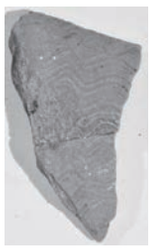



50　外面　　内面

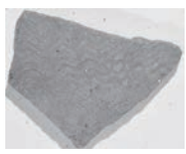
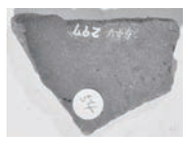
51　外面　　内面

52　外面　　内面

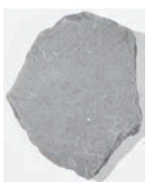
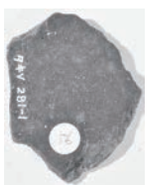


53　外面　　内面

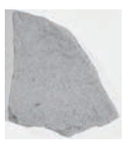



54　外面　　内面

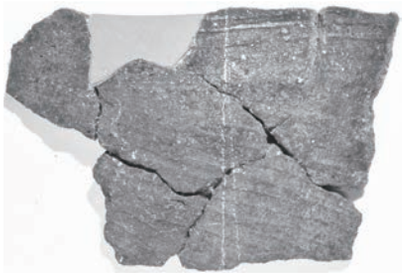
55　外面　　内面

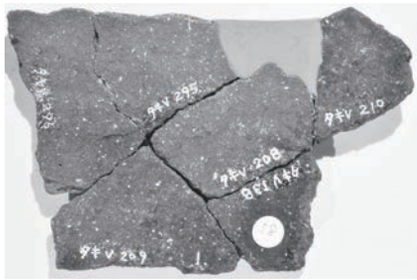



56　外面　　内面



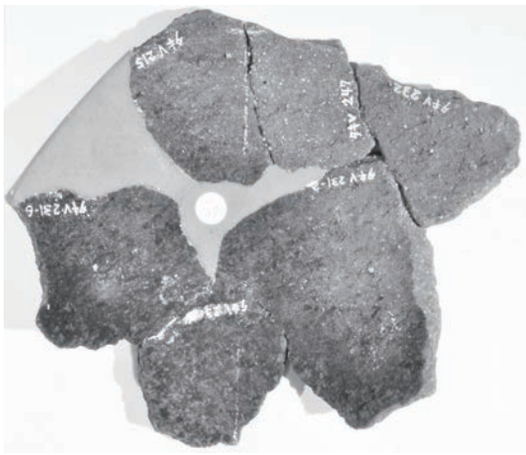
57　外面　　内面





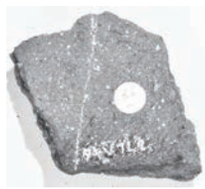
58　外面　　内面

59　外面　　内面

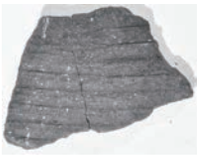


60　外面　　内面

61　外面　　内面

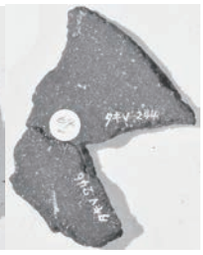


62　外面　　内面



63　外面

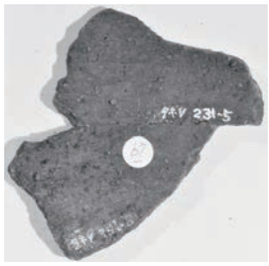
内面



64　外面　　内面

65　外面　　内面

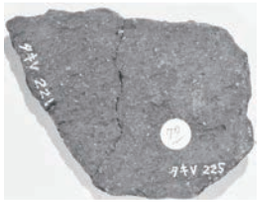
66　外面　　内面



67　外面　　内面

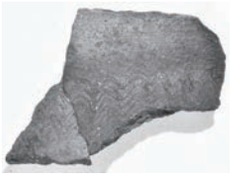
68　外面　　内面

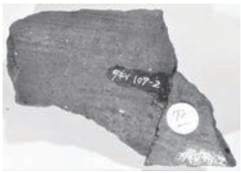
69　外面　　内面



70　外面　　内面

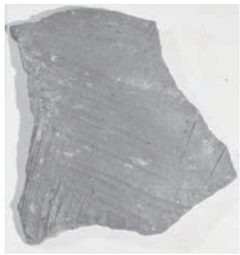
71　外面　　内面

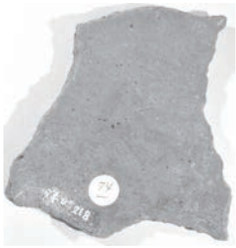




72　外面　　内面

73　外面　　内面





74　外面　　内面

75　外面　　内面

出土遺物写真（13）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	たきざわいせき（だいごじ）
書　　名	滝沢遺跡（第５次）
副　書　名	ガソリンスタンドの建設に伴う発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	富士河口湖町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第２集
編　著　者　名	杉本悠樹
編　集　機　関	富士河口湖町教育委員会
所　　在　　地	〒401-0301　山梨県南都留郡富士河口湖町船津 1754　TEL 0555-72-6053
発 行 年 月 日	2017 年 3 月 31 日

ふ　り　が　な		たきざわいせき　ななく
所　収　遺　跡		滝沢遺跡　Ⅶ区
ふ　り　が　な		やまなしけんみなみつるぐんふじかわぐちこまちかわぐちあざたきざわ
所　　在　　地		山梨県南都留郡富士河口湖町河口字滝沢 549-1
コード	市町村	19430
	遺　跡	河‐11（旧河口湖町域）
北　　緯		35°31′13″
東　　経		138°46′40″
標　　高		845m
調　査　期　間		20160926 ～ 20161011
調　査　面　積		90 ㎡
調　査　原　因		ガソリンスタンドの建設
種　　別		集落跡
主　な　時　代		弥生時代、古墳時代
主　な　遺　構		土坑５基、焼土遺構３基、溝状遺構１条

富士河口湖町埋蔵文化財調査報告書　第２集

滝沢遺跡（第５次）

—ガソリンスタンドの建設に伴う発掘調査報告書—

発行日　平成 29 年 3 月 31 日
発行者　富士河口湖町教育委員会
〒401-0301
山梨県南都留郡富士河口湖町船津 1754
TEL　0555-72-6053
印刷所　株式会社　サンニチ印刷
〒400-0058
山梨県甲府市宮原町 608-1
TEL　055-241-1111
FAX　055-241-1220

Fujikawaguchiko Town Board of Education
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH PAPERS No.2

TAKIZAWA-SITE(5th)

Results of an Excavation for Construction of the Service Station

March 2017

Fujikawaguchiko Town Board of Education

NOBORISAKA-SEKIYU Corporation